

薦うゑて竹四五本のあらしかな
といふ句があつた。

途中に約一ヶ月をつひやして、やつゝ伊賀上野にいら、故郷の家へたどりついたのは、九月の上旬であつた。足かけ十三年目の歸郷とて、みるところ、きくところ、すべて想像以上にかはつてゐた。母屋をはじめ、くちにくちて、昔の面影はなく、家のまはりの萱草も、今は霜にかれはて、跡をさへとどめなかつた。

それよりも、もつと傷心にたへなかつたのは、兄半左衛門が、おもひの外においてゐることであつた。眉のあたりには皺がより、髪も、髭も、眞白になつてゐて、一瞥にはその人とおもはれないくらゐであつた。

『ほんのいきとるといふまでぢや。今はもう何もできぬ。』といつて、聲をくもらせた。芭蕉は、無量の感慨にうたれて、これもたゞ涙であつた。

父は、夙に世をさり、芭蕉は、母の手にそだてられたのであつた。その母も、芭蕉の出府中に世をさつた。兄は、母の臨終の模様などを、何くれとものがたり、やがて守袋から、母

の遺髪をこりたして、

『さ、浦島の子の玉手箱ぢや。これを見たら、お前も急に年こるぢやらう。母上の白髪ををがまれよ。』といつた。「母上の白髪、」それは、霜のやうに白かつた。むかし石勒は、王浚から拂子をおくられると、それを柱にかけておいて、あふぎ見ることゝ王浚をしのび、

『今王公をみることはできぬけれど、王公愛玩のこの拂子を見ると、王公をみるやうな心地がされる。』といつた。一個の玩好さへさうである。いはんや子をもつて母の遺髪をみるやで、芭蕉の目からは、あつい涙が、はらはらこぼれた。

手にとらばきえん涙ぞあつき秋の霜

四四 どくどくの清水

千里をともなつてゐる芭蕉、ことには秋の吉野をはじめ、諸所巡遊の心でゐたこととて、ながくは故郷にもとどまりかね、滞在わづかに十日あまり、またも風雲に身を托して、大和にむかひ、まづ同國葛城郡竹の内といふへいつた。すなはち千里の舊里である。

その地河内にちかく、葛城山脈の麓にあつて、片田舎のさびしさが、時分がら、身にしみじみと感ぜられた。藪の奥に家があつて、綿をうつ弓の音が、びんびんときこえてくるのも、いひしらぬ閑寂さがあつた。

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

千里の家に逗留して、日の幾日かをすすうち、一日、二上山當麻寺へ参詣した。世にきこえた名刹の庭には、一株の古松があつて、千年の齡をかさねたかきもおもはれ、そのおほいさは、莊子にみえる樸社の樹をそのままに、牛をおほふともいひたい程であつた。

『非情のものながら、樸社の樹は、無用の散木といふことがさいはひして、その壽をまつたうしたといふ。今この松は、佛縁にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたのぢやらう。まことにたふとくおもはれる。それにしても、この松がこれ程にそだつ間には、随分幾人もの僧が、しにかへつたことぢやらう。朝顔も、幾度となくさいたり、ちつたりしたぢやらう。』
松の長命をおもふにつけても、無常流轉の世が感ぜられた。

僧あさがほ幾しにかへる法の松

芭蕉は、やがて千里の許を辭して、たゞ一人、吉野の奥へたづねいつた。山ふかふか、白雲は、峰にかさなり、霧雨は、谷をうづめて、人氣があるともおもはれぬあたり、さゝやかな樵夫の家が、こちらに一つ、あちらに一つとみえるなど、さながら名匠の手になつた墨繪のやうであつた。木を伐る音は、丁々と耳にひびき、夕暮の鐘の聲は、殷々と心にこたへた。芭蕉は、ほとんど他世界の心地をしながら、

『むかしから、世俗の生活にうんじた人が、この山へはいつて、詩にのがれ、歌にかくれたに不思議はない。話にきく唐土の盧山のやうぢや。』ふとそんなことがおもはれた。

その夜は、ある寺に宿をかりた。

砧うつてわれにきかせよ坊が妻

しづかな山中の砧は、山々にひびき、谷々にこだまして、下の里へもきこえるかきおもはれた。

一人には廣すぎる本堂にうちふした芭蕉は、さびしさいふばかりなく、ねざめがちに一夜をあかして、翌日は、西行の遺跡をとらた。吉野にあそんだ第一の目的は、このことにあつ

たのであつた。

庵の跡は、奥の院から右の方へ二町程はいつてゆくと、けはしい谷一つへだてたむかふにあつて、それへはわづかに柴人のかよふ道がついてゐた。その境、その人をしのばしめて、まことにたふとくおもはれた。

無常の感におそはれたはじめ、西行は、都に妻や子をおいて、世をこゝにのがれてゐたのであつた。

吉野山やがていでじとおもふ身の花ちりなば三人やまつらん

さすがに妻子の心中はおもひやられながら、花がちつても、青葉になつても、西行はかへらなかつた。

さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべんふゆの山ざと

芭蕉は、

『自分は、はたしてその人でありうるかどうか？』かううたがつて、みづからあはれむの情にたへず、想望の念をあらたにした。

あさくともよしやまたくむ人もあらじわれにことたる山の井の水

とよまれ、

とくとくとおつる岩間のこけしみづくみほすほどもなき住居かな

とよまれたとくとくの清水は、昔ながらにとくとくとおちてゐた。

露とくとくこゝろみに浮世すゝがばや

『もし扶桑に伯夷がゐたら、かならず口をすゝぐぢやらう。もしこれを許由につけたら、かならず耳をあらふぢやらう。』そんなことをおもひながら、なほも山をのほり、坂をくだる程に、秋の日脚のうつるにはやく、やうやく斜ならんとするに、名のあるところどころをみのこして、まづ後醍醐帝の御陵を拜し、はるかに吉野朝のいにしへをしのんで、しばし追憶の涙にくれた。

御廟年をへてしのぶは何をししのぶ草

四五 美濃の大垣

大和から山城へ、それより近江路をへて、美濃へはいつた。美濃の今須山中には、常盤の墓があり、むかし伊勢の守武は、「義朝殿ににたる秋風」といつた。

『どこがにさるかしら？』などおもひながら、

義朝のこゝろににたり秋の風

不破の關址は、關ヶ原にあつて、光景いさだものさびしく、みるからに懷古の情がこみあけてきた。

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣では、木因を主とした。木因は谷氏、善太夫と稱し、船問屋をいとなみ、同地の富人であつた。前に季吟にまなんで、俳諧をよくし、杭瀬川の翁としてしられ、その該博は、風に芭蕉の嘆服するところであつた。ひさしく旅中にあつた芭蕉は、この舊友の家におちついたとき、頓に五體のくつろぐをおほえた。

三同時に、三個月の前、野ざらしを心に武藏野をたつたこゝをおもひだして、

しにもせぬ旅寐のはてよ秋の暮

従來貞風と談林との間を右往左往してゐた木因は、この句に耳をそばだてた。芭蕉は、右の「不破の關」の句をはじめ、旅中詠するところ、さては舊吟にさかのほつて、木因によみきかせ、かつ工夫の存するところをものがつた。木因は、

『なるほど、それが本當の俳諧ぢや。今まで自分のやつてゐた貞風や談林は、ほんの筆先、口先のたはむれにすぎぬ。』心おほいにうなづくところあり、これをかぎりに蕉門に歸した。

よき程につもりかはれよ蓑の雪 木因

冬のつれとて風もあとから 芭蕉

時にこんな句があつた。

同地には、木因を先達として、なほ他に、如行、荆口などがゐた。いづれも木因の紹介によつて、この時芭蕉の門下にはいつた。中にも如行は、芭蕉をその家にまねいて、ねんごろに款待し、

霜さむき旅寐に蚊帳をきせまをす

の句を呈した。芭蕉は、その篤實古人の風があることをよろこんで、

古人がやうの夜の木がらし
まつけた。

勢州山田の人なる雪枝、塔山などが入門したのも、この頃であつた。

宿まるらせん西行ならば秋の暮 雪 枝

芭蕉とこたふ風のやれ笠 芭 蕉

また、

師の櫻むかしひろはん木の葉かな 塔 山

すゝきに霜の艶四十一 芭 蕉

年四十一、不惑の坂を一つこしたばかりの芭蕉は、髪にも、髭にも、ほつほつ霜をおいてゐた。苦勞のおほい多年の漂泊的生活が、年よりはやくおいしめたのであつた。

如行は、芭蕉をともなつて尾張熱田の桐葉をとふ途中、一夜を桑名の本當寺にとまつた。

本當寺の庭には、牡丹が、しろく、おほきくさいてゐた。夏の牡丹には、時鳥がなかう。冬の牡丹には、千鳥がないた。

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

桑名から海上七里の渡をわたれば、そこが熱田である。草枕にねあきた芭蕉は、如行ととも、まだほのぐらいうちから、濱邊へでた。漁夫のすくひあけた白魚が、朝の光のうちに白々みえた。

あけほのや白魚しろきこと一寸

四六 熱田と名古屋

熱田へわたると、まづ熱田神宮にまうでた。をりから社殿もひどくやぶれ、築地はたふれて叢にかくれ、かしこには繩をはつて、某祠のしるしとし、こゝには石をすゑて、某神名のあるなど、慘澹たるありさまで、蓬、しのぶが、おもひのまゝにおひしけつたところは、めでたいよりも、勿體なくおもはれて、なかなか心がとまつた。芭蕉は、神前の餅屋にやすんで、

しのぶさへかれて餅かふやどりかな

熱田では、桐葉にむかへられて、その家に草鞋をぬいだ。桐葉をはじめ、東藤、叩端、玉山などの人々が、あひひきゐて入門した。よつて歌仙などあり、さらに名古屋へおもむく途中、

狂句風の身は竹齋ににたるかな

むかし京都に五十嵐某といふ醫者があつた。つとに隱心があつて、狂歌をこのみ、もとより世の計につたなければ、治療をこふものもなく、家は年中貧乏してゐた。年五十におよぶころ、人が藪醫とよぶにおもひあはせて、竹齋と號し、家業をすて、江湖放浪の身となり、いたるところに諷詠して、みづからたのしんだ。かつて、

三界無安、猶如火宅。

秋風にあきはて、世の關こせばまた身にさむき風のかぜ

この詠があつた。

笠は、長途の雨にやぶれ、紙衣は、とまりとまりの嵐にもめて、わびつくしたわび人の身を、われながらあはれにおほえた芭蕉は、この竹齋が、この國をさすらひあるき、はては名

古屋で客死したことをおもひだすと、

『竹齋の風體も、自分のやうちやつたらう。いや、こゝにかうして、とほまほとあるいてゐる自分が、すぐに竹齋ぢやないかしら？』ふとそんな氣がした。

名古屋には、野水、荷兮、重五、杜國、正平などがゐて、芭蕉を歓迎し、これまた門下に歸した。よつて歌仙五卷、追加六韻の詠があつた。巻頭の歌仙は、芭蕉の「狂句風」の句を發句として、

たそやまはしる笠の山茶花 野水

有明の戸水に酒屋つくらせて 荷兮

かしらの露をふるふあか馬 重五

朝鮮のほそり薄のほひなき 杜國

日のちりちりに野に米をかる 正平

以下三十六韻にいたり、第五の歌仙は、荷兮の句、

田家眺望

霜月や鶴のつくづくならびるて
これを發句として、

冬の朝日のあはれなりけり 芭蕉
檜檜山家の體を木の葉ふる 重五
ひきずる牛の鹽こほしつゝ 杜國
音もなき具足に月のうすうす 羽笠
酌とるわらべ蘭きりにでて 野水

これも以下三十六韻にいたり、もつて五卷の歌仙を完了した。

この歌仙は、のち「冬の日」と題して上梓せられ、芭蕉七部集の第一におかれた。
名古屋に帯在中、一日雪見にこでかけた。

市人よこの笠うらう雪の笠
同伴の内には、

『風人にはうれい雪の笠。しかし市人には、三文の値打もあるまいよ。』と、心にわらふも

のもあつた。

まことに、利害一點ばりの市人にとつて、雪の笠が何にならう？ 三文の價值もありはせぬ。けれど風人芭蕉にとつては、それが何よりもうれいのであつた。そこには、かれのもつて俳諧の生命とするさびがあつた、しをりがあつた。みてもみつくせぬ風流、風雅のおもむきは、金の笠、銀の笠にもまさる雪の笠であつた。

世わたる道におろかはなくて。そんな雪の日にも、驛馬にまたがつた旅人が、ちらほらこ
とほりかゝつた。

『人は勿論、馬もさぞ……』とおもひやりながら、
馬をさへながむる雪のあしたかな

と、温情流露の句があつた。常に無益の殺生をいましめ、後年加賀の一笑への消息にも、
たとへころさずこても、雲にとび、地にはしり候鳥を、ちさき籠にいれ、たのしみとな
すは、牢番もおなじことに候を心つかず、籠をならべて、これは二兩の駒鳥なり、これ
は五兩の鶯なりといひて……あさましきさまする人、武林連中にはあるものに候。

さ嘆じた心もちが、この句にもみとめられた。

またある時は、熱田の桐葉方にあつて、海邊にあそび、一日をあそびくらしした。をりからどこかに鴨がゐるて、その聲のみが、ものさびしくきこえてきた。

海くれて鴨の聲ほのかにしろし

貞享元年の年も、おひおひにくれていつた。暮の商家はいそがしい。世すて人の芭蕉には暮も正月もなかつたが、桐葉、荷分ら、それぞれ家業のある身は、さうはゆかなかつた。そのいらいらした中に、たゞ一人俳諧をたのしんでゐるのは、その對照が目につきすぎて、芭蕉も何とやら気がひけた。ことに故郷で越年するやう、兄と約束したこともあればと、一旦歸國することにした。

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

さいひながら、上野へかへり、伊賀の山中、しづかな山家に年をこして、

たが聲ぞ齒朶に餅おふ牛の年

貞享二年は牛の年。芭蕉は、四十二歳の春をむかへた。

四七 琵琶湖畔

春早々、芭蕉は、またも故郷を發して、先づ奈良にあそんだ。その途中、

春なれや名もなき山の朝霞

春がくれば、すべてが春になつて、一物として春をもれるものはない。秋がくれば、すべてが秋になつて、一物として秋をもれるものはない。それをおもつて、芭蕉は、自然のゆきとどいた仕掛におどろいた。

奈良では、二月堂に參籠して、水取の古式を拜した。

水取やこもりの僧の沓の音

それより京都にのほり、鳴瀧の山家にかくれすむ三井秋風にまねかれた。この人、京都の富家にうまれながら、風雅をよろこび、詩歌をこのむ心から、市塵をさけて、身を山中におくよしきこえてゐた。邸内には梅がおほく、をりから二月の日光のなかに、今をさかりと芳香をはなつてゐた。芭蕉は、ふと梅花詩人林和靖のことが聯想せられた。

梅しろし昨日や鶴をぬすまれし
今一句、

櫛の木の花にかまはぬ姿かな

さよんで、眞の風雅の、はなやかなれにたくして、さびたこれにあることを諷誡した。
しかし、この道のたすけともなる人におもつたので、江戸へかへつてのちも、

おつてまをしいれ候。このたび三度飛脚にまをしつかはし候こゝは、京の勝手よく存じ候故、指圖せられ候。からす丸通にて、いづれにてもおあつらへ、おくだしたまはるべく候。文庫草草にて、覆さもにたのみいり候。覆は、竹屋町細工おあつらへ、たのみいり候。料は、書付おくだしたまはるべく候。またまた飛脚にてのほせまをすべく候。さて俳諧もはやりまをし候。何をまにしても、けはしきところゆゑ、しみじみとはできまをさず候。この程は、愛宕の下へまゐり候。二三會も興行これあり、江戸衆も上手になられ、よろこびまをし候。

蛤にけふはうりかつ若菜かな

右の句を元にして百韻いたし、その節は其角などもまゐり候て、おもしろくなくさみまをし候。貴文こと噂まをしいだし候。なほおひおひまをしいるべく候。以上。

二十二日

ば せ を

秋 風 丈

おもふこと二つのけたるそのあまは花の都もゐなかなりけり

以上

ば せ を

などかきおくつた。

しかるにこの秋風は、道を解するほどの人物ではなく、金と暇のあるところから、風雅めかして人におごるといふ、いはゞ似而非風流人であつた。それとすると、芭蕉は、かさねて足をその門へむけなかつた。

ついで伏見の西岸寺に任口をこゝた。任口は、佛道をとき、芭蕉は、俳諧を談じて、しづかに春の一日をくらしした。

わが衣に伏見の桃のしづくせよ

伏見から江州大津への途すがら、山路をこえやうこして、ふと堇の花を發見した。おほきな春のなかにさいたちひさな紫の花が、いひしらすゆかしいものにおもはれた。そのみたまゝ、感じたまゝを、

山路きて何やらゆかしすみれ草

堅田へくるまゝ、あらたに入門した千那の本福寺へはいつて、幾日かを逗留した。時に「湖水眺望」を題して、

辛崎の松は花よりおほろにて

の一句があつた。のち、この句の「にて」留について、其角、去來などの諸門人が、やかましく論じあつた。芭蕉は、それをきいて、

『其角や去來のいふところは、みんな理屈ぢや。自分はたゞ、花よりも松がおほろで、おもしろかつたまでぢや。』といつた。

當時琵琶湖畔の各地では、大津、堅田、膳所、彦根などをはじめ、非常に俳諧がはやつてゐた。それは、大概貞風または談林の俳諧であつたが、このとき以後、芭蕉の門にいるもの

がおほく、のちこの地は、江戸、名古屋、金澤とならんで、正風の淵叢となつた。

湖畔を吟行のをりから、二三の句があつた。ある茶店に腰かけて、

躑躅いけてその陰に干鱗さく女

茶島に花見顔なる雀かな

水口では、二十年前の故人に邂逅した。

命二つ中にいきたる櫻かな

芭蕉は、つねに「死」といふことを念頭においてゐた。

『無常の世に、自分のやうな體のよわいものが、とにかく生きてゐるまゝいふのは、不思議なことぢや。』時々そんなことをおもつた。二十年前の故人にあふなどは、芭蕉にとつて、まことにおどろくべき出来事であつた。

四八 歸庵のよろこび

匠江からふたゞび尾張にいり、熱田の桐葉をとつたのは、もはや春の末であつた。芭蕉が

「すみれ草」の句をみせると、それを發句として、

編笠しいて蛙きゝをる

叩端

田螺わる賤の童のあたゝかに

桐葉

といふ歌仙があつた。

芭蕉の名とそのこの邊へきてゐることとは、ひろく世間にしれわたつてゐた。近江、美濃尾張、伊勢諸國の俳人は、その行方をさぐり、旅宿へたづねては、俳諧をとひ、師弟の約をむすんだ。その中に、ある日桐葉方へとうてきたのは、一人の雲水僧であつた。

『愚僧は、伊豆の蛭ヶ小島のものでございます。昨年来行脚にててをりますところ、當地御巡遊のよしをうけたまはり、御高風をしたつてまゐりました。旅の道づれにおつれくださるわけにはまゐりませうまいか。』とのことに、芭蕉は、その志に感じて、

『それは好都合、當方よりもねがふところぢや。』とこたへ、とりあへず、

いざこにも穂麥くらはん草枕

種々物語のうちに、僧は、鎌倉圓覺寺の大嶺和尚が、今年正月のはじめ、遷化せられたよ

しをつけた。和尚は、かつて芭蕉の參禪した人、かつ其角の詩文の師であり、俳諧にもたづさはつてゐた。芭蕉は、ほとんど夢の心地をしながら、筆をとつて、其角への一書をしたゝめた。

草枕月をかさねて、露命つゝがなく、今程歸庵におもむき、尾陽熱田に足をやすむるあひだ、ある人われにつけて、圓覺寺大嶺和尚、こゝし睦月のはじめ、月まだほのぐらき程、梅のほひに和して遷化したまふよし、こまやかにきこえはべる。旅といひ、無常といひ、かなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ、一翰机右に投するのみ。

梅こひて卵の花をがむ涙かな

四月五日

はせを

其角雅生

二度目の旅宿なる桐葉方を辭し、いよいよ東歸の途にのほらうとして、

牡丹蕊ふかくわけいづる蝶の名残かな

桐葉をはじめ、あらたに蕉門にはいつた熱田、名古屋の弟子たちは、この新俳諧の開山師

の前に、敬愛のかぎりをさへけた。今わかれにのぞんで、芭蕉は、若干の哀愁なきをえなかつた。

歸路は、木曾路へまはる豫定。

おもひやる木曾や四月の櫻がり

名古屋の杜國への留別の句に、

白芥子に羽もぐ蝶のかたみかな

途中、尾州鳴海の知足亭にたちよつて、

杜若われに發句のおもひあり

それより木曾路をへて、甲斐の山中にわけいり、空水などにあひ、途すがら、

ゆく駒の麥になぐさむやどりかな

かくて江戸にかへりつき、深川芭蕉庵の舊棲へはいつたのは、四月の末であつた。去年の秋江戸を發して、今年の夏江戸にかへる。一年の大部分をつひやした勘定で、この旅行、まことにこれ大旅行であつた。

師の歸庵をまちにまつてゐた江戸の門人らは、あとからあとからとやつてきた。

『お、おかへりでございますか。』

『大分御ゆつくりでしたね。』

『御無事で、おめでたう存じます。』たれもかれもが、喜色満面であつた。

『かへつたばかりで……』

夏衣いまだ風をとりつくさず

芭蕉も元氣にこたへた。出發の際、師の身の上を案じて、これきりのわかれになりはせぬかと、心ほそくおもつた人たちも、こゝにいたつて、ほつと安心するこゝができた。

四九 「自得の箴」

歸庵早々、甲斐の空水への書中に、

おつてまをしいれ候。この中は、ふじにながなが逗留、その上お世話になり候。別して御内方様、お世話に候。いそがはしきなかに、うかうかさいたしをり候て、きのどくに

候。長雨にふりこめられ候こと、とかうにおよびがたく候。

いづれへもよろしくおんまをしたまはるべく候。

としたよめた。芭蕉は、旅中いたるところで、當の門人からは勿論、その家人からも、心づくしの款待をうけた。その高潔雪のごとき人格は、無智の女子供にすら、敬愛のまことされたのであつた。

五月十三日附、江州堅田の千那へは、

貴墨うやうやしく拜見、御無事のよし、珍重に存じたてまつり候。そのもと滞留のうち閑談をえ候て、珍奇まをし候。

一、愚そのもとにての句、

から崎の松は花より 臚 にて

おんおほえくださるべく候。

山路きてなにやらゆかしすみれ草

その外三五句もいたし候へども、かさねてまをすべく候。

一、この秋、この萩のあらそひ、もつとも、この道是非をあらそふも、道のひとつにて御座候へども、あながちに句論をすくこと、愚意このましからず候。かねてよき程におんあらそひ、御もつこもに候。

一、其角へ御狀、かさねて返狀つかまつるべく候。嵐雪他國へまかり候あひだ、貴報におよばず候。何やらかやら、いまだとりこみ、舊友ひさびさ話どもさしつもり、手透御座なく候。貴報たのみ存じ候。

とかきおくつた。芭蕉は、推蔽に力をいれる人であつた。「山路きて」の句にも、最初は「何となく何やらゆかし」にあつたのを、のち右のごとくにあらためたのであつた。「この秋、この萩のあらそひ……」芭蕉はまた、俳諧に理屈をきらつた。

この頃、文鱗から出山釋迦の木像をおくつてきた。芭蕉の草庵には、まことにふさはしいおくりものであつた。早速床の間に安置して、たふといその金口から、「諸法従本來、常示寂滅相」のおさとしをかうむる心地があつた。うれしさに、

南も佛草の臺もすゞしけれ
の一句があつた。

六月には、其角、嵐雪、素堂らの諸門人と、小石川關口水道町の清風亭に會して、百韻連句をもよほした。その連句は、のち「すゞしさの巻」と題して、上梓された。

この年、桑門宗波が、しばし庵をすて、行脚にでた。その庵は、芭蕉庵とあひまなりしたえず往來してゐたこととて、芭蕉は、その不在中のさびしさをおもひながら、

古巢たゞあはれなるべきとなりかな
の一句、もつて餞とした。

年は、おひおひくれていつた。芭蕉の貧は、依然として舊のごとくであつた。門下幾百人名聲のさかんなる、單に「翁」のみで、人は、その芭蕉翁であることをしるほどの身となつて、なほかつ貧を脱しなかつたのは、かつて門人らの評したとほり、このんで貧乏したのであつた。

もらうてくらひ、こうてくらひ、肌寒わづかにのがれて、

めでたき人の數にもいらん年の暮

これに題して、「自得箴」といつたこと、もつて芭蕉の心境をうかゞふことができた。かれは、貧寒徹骨のあひだに、わびてすむこゝを、おのれの本領としたのであつた。

五〇「初懷紙」の撰

あくれば貞享三年、芭蕉は、四十三歳になつた。正月には、其角、杉風以下、一門の鐸々たる人々も、百韻の興行があつた。それは、當時における蕉門の新傾向をみるにたるものであつた。すなはち世にとふこととなり、毎句芭蕉の評語をくはへ、「初懷紙」と題して、梓にのほせた。

日の春をさすがに鶴のあゆみかな 其角

元朝の日はなやかにさしいで、のどかに幽玄なるけしきを、鶴にかけていひつらねはべる。祝言々外にあらはる。「さすがに」といふてには、感おほし。

みぎりにたかき去年の桐の實 文鱗

貞徳老人いふ、脇道四道ありきたてられはべれども、當時はふるくなりて、景氣をいひそへたるをよろしとす。梧桐とほくたちて、しかも木枯のまゝにして、かれたる實の梢にのこりたるけしき、言葉こまやかにして、桐の實さいふは、桐の木といはんもおなじことながら、元朝に梢は冬めきて、こがらしのそのまゝなれども、ほのかすみて朝日にほひいで、うるはしくみえはべる體なるべし。たゞし桐の實とつけたるあたらしみ、俳諧の本意かゝるころにはべる。

雪村が柳みにゆく棹さして

枯風

第三の體、長たかく、風流に句をつくりはべる。發句の景とすこしかはり目あり。柳みにゆくとあれば、いまだ景に對せざるなり。雪村は、畫の名筆なり。柳をかくべき時節その柳をみてゑがかんと、みづから舟に棹さしていでたる狂者の體、珍重なり。桐の木立、よみやう奇特にはべる。つけやう大切なり。

以下この例によつた。

「初懷紙」に執筆中、芭蕉は、胃腸を損して、しばらく病床の人となつた。病間の一日、は

るかに淺草觀音の鷺をみやりつゝ、

毘沙門堂の花ざかり、四王天の榮華も、これにはいかでまさるべき。うへなる黒谷、下河原、むかし遍照僧正のうき世をいとひし花頂山、わしのみやまの花の色、かれにし鶴の林まで、おもひやられてあはれなり。

といふ詞書の下に、

觀音のいらかみやりつ花の雲

この一句があつた。

別に大病といふではなければ、心地のすぐれたをりをりは、机によつて、註釋の筆をこつた。師の仕事をさまたけてはと、たゞまれにのみ見舞にくる門人も、そこそこひきこる例であつた。かくて春の芭蕉庵には、しづかな日がつゞいた。

あるあたゝかい日の午後であつた。朝からの執筆に、かるい疲労をおほえた芭蕉は、椽側の柱にもたれて、じつと庭をみつめてゐた。火災につゞいて、野ざらしの旅に、ひさしく主人をかいた庵の庭は、あれるがまゝにあれてゐた。檐の芭蕉だけは、日ましにあをい葉をひ

ろけていつたが、池のあたりは、舊によつて荒涼たるものであつた。藻や木の葉がういて、水面の過半をおほひ、ほとりには、去年のまゝの枯葦のなかに、新葉がすいすいこのびてゐた。それは、まことにみる影もないあれ方であつたが、芭蕉は、なほかつその間から、物さびたおもむきを看取するこゝができた。

五一「古池や蛙」の句

突如として音があつた。天地の閑寂をやぶつたその音は、蛙のとびこむ水の音であつた。その一刹那「蛙とびこむ水の音。」われにもあらず口ずさんだ。あまたとび口ぐさむ程に、芭蕉の心は、いつしか閑寂のどん底へ没入した。芭蕉みづから、蛙となり、水の音となるをおほえた。

古池や蛙とびこむ水の音

たちまちにしてこの句をえた。
そしておもつた。

『これ、面あたりの光景ぢや。面あたりの光景、そこに眞の風雅がある。天地すなはち風雅ぢや。風雅すなはち天地ぢや。天地と風雅と二物ぢやない。いふべくは、風雅は、天地の精隨ぢや。佛祖の肝膽も、こゝにある。自分の俳諧も、こゝにある。』芭蕉は、ふかく心にうなづきつゝ、筆をとつて、これが詞書をつくつた。

それ天地は風雅なり。萬象もまた風雅なり。この風雅は、佛祖の肝膽なり。造化にしたがひて、四時を友とす。みるところ花にあらずといふこゝもなく、おもふところ月にあらずといふことなし。心月にあらざれば、禽獸にひとしく、かたち花にあらざれば、夷狄に類す。夷狄をいで、禽獸をはなれて、造化にかへれよ。

〔支考〕のつたふるところに、草庵での一日、芭蕉は、二三子をかへりみて、

『今の世の風は、たとへば風にのぞむ片雲のごとくぢや。一は皂狗となり、他は白衣となつて、こもにまよるところをしらぬ。おもふに中間の一理があるのぢやらう。』とかたり、やゝしばらく静思にふけた。

時にしとしとふる春雨のなかには、鳩の聲がふかくきこえ、やはらかにふく風のまへに

は、櫻の花がおそくちつてゐた。彌生もなごりのをしまれるころにて、蛙の池へおちる音もまれであつた。その物しづかな光景に感じて、「蛙とびこむ水の音。」芭蕉は、まづこの七五をえ、上の五文字をさだめかねた。

すると側に其角がゐて、

『山吹や』は、いかゞでせう？』と提議した。芭蕉は、

『それもよい。』とうなづきながらも、若干あきたりないところがあり、つひに「古池や」とかぶせることにしたのであると。

さはれ、「枯枝に鳥」の一句に、俳諧のあたらしい道が、さび、閑寂にあることを発見した芭蕉は、今また「古池や」の一句に、いはゆるさびが、面あたりの景物中にあることを看破した。正風の基礎は、こゝにさだまつた。この意味において、この句は、芭蕉の句中、もつとも肝要なるものとしてしられるやうになつた。

さきに「冬の日」を發行した名古屋の門人らは、このころ歌仙三巻をつくり、それに各自の發句をそへて、「春の日」を題したものゝを、さらに發行することとなり、その草稿を芭蕉の手

許へおくつてきた。そのうちには、のち蕉門の十哲中にかぞへられた越人をはじめ、新加盟者なるたれかれの名がみえた。芭蕉は、各自の進境のいちじるしいことをよろこび、かつてよんだ、

雲をりをり人をやすむる月見かな

それに右の「古池や」の句などをよせて、いさゝか聲授するところがあつた。

五二 雪の一夜

春もすぎて夏となり、夏もいつしか秋となつた。あるとき骸骨の繪に賛をこはれて、

夕風や盆提灯も糊ばなれ

人は四大の寄細工、四大があつまれば、人があり、四大が散すれば、無に歸する。たゞへば盆提灯の糊ばなれも一般である。それをおもつての句であつた。

李下によせて、

稻妻を手にとる闇の紙燭かな

月見の一夜、頭のまるい芭蕉をみて、座頭とあやまり、

『座頭の月見はをかしい。』とわらふものがあると、

座頭かと人にみられて月見かな

間もなく冬がきて、冬も師走の十二日には、初雪がふつた。清淨のきはみなる天のこのおくりものには、あれはてた草庵の庭も、面目をあらためて、急にあかるくなつた。平素はしつみがちでゐるた芭蕉も、頓に心のひきたつをおほえて、

初雪やさいはひ庵にまかりある

これをはじめに、この年は、いつになく雪がおほかつた。ある雪の夜に、たゞ一人庵にこもり、たれこふものもなくしてゐるさ、柴の戸あけて、曾良がやつてきた。

曾良なにがしは、このあたりちかくに居をしめて、あさなゆふなにとひとつとはる。わがくひものいさなむ時は、柴をりくすぶるたすけさなり、茶をにる夜は、きたりて軒をたく。性隠閑をこのむ人にて、まじはり金をたつ。

としるされてゐる人で、淨求のゐなくなつてのち、芭蕉の朝夕は、この人におふところが

おほかつた。

君火をたけよよきものみせん雪まろけ

芭蕉には、ここに今宵の訪問がうれしかつた。

これも雪の夜、嵐雪が同門四五輩とともにやつてきた。火鉢の中に、六疊一と間によりこぞり、歌仙などをこゝろみるうち、おひおひ時刻がうつつていつた。

『大分寒い。夜食には、何かあたゝかいものをとおもふが……』芭蕉の言葉をうけて、

『あたゝかいものといへば、まづ酒でせうね。』

『湯豆腐で熱燗一杯などは、結構でせうよ。ぢやかつてきませう。』

『いやまたれよ。それだけでは、まだたらぬ。』

『澤山でせうよ。』

『いやいや、近來種ぎれで、炭もとほしい。薪もない。それに茶もきれた。』

『それは大變！ では、銘々手をわけてかつてきませう。』となり、芭蕉の米かひをはじめとして、たれは酒、たれは炭、それぞれ買物にでかけた。

かくて湯豆腐をつくり、酒をあたゝめて、かつくひ、かつのみながら、をりからの雪を題に、買物を句にして、興じあつた。

米かひに雪の袋やなけ頭巾 芭蕉
雪の夜はとりわき佐野の薪かはん 依水
酒やよき雪ふみたてし門の前 苔翠
炭一升雪にかさすや山折敷 泥芹
雪にかふはやしごとせよ茶の袋 夕菊
手にすゑし豆腐をてらせ雪の月 友五

五三 いとゞねられぬ

はじめて深川に卜居したころの句に、

憂方知酒聖、貧始覺錢神。

花にうき世わが酒しろく飯くろし

とあり、のち元禄元年の句に、

御命講や油のやうな酒 五・升

とあつて、芭蕉は、酒をこのんだ。其角に「朝顔」の句をあたへて、その大酒をいましめたくらゐで、勿論おほくはのまなかつたが、とにかく酒をこのんだ。この年、元起和尚から酒をおくられるこ、

水さむくねいりかねたるかもめかな

の一句に、その好意を謝した。内省的で、しかも體のよわかつた芭蕉は、年よりもはやくおい、まだ四十三といふに、冬の夜など、さむさにねられぬこもあつた。そんな時には、手許にあり次第、一杯のんで褥にはいるのを例とした。

が、それは、大概むだであつた。のむにつれ、おもふにつれて、頭がますます沈痛になり深刻になり、月のさゆるがごとくにさえていつて、かへつてねられない場合がおほかつた。

「閑居の箴」に、

あらものぐさの翁や。日頃は、人のとひくるもうるさく、人にもまみえじ、人をもまね

かじと、あまたよび心にちかふなれど、月の夜、雪の晨のみ、友のしたはるよも、わりなしや。物をもいはず、ひとり酒のみて、心にこひ、心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、または杯をこりて、筆をそめ、筆をすつ。あらものぐるほしの翁や。

酒のめばいとどねられぬ夜の雪

といへる、月にも、花にも、はた酒にも、芭蕉は、徹底的にわび人であつた。

李下の妻をいたんで、

かつぎふす蒲團やおもき夜やすごき

年は、おひおひくれていつた。

うかうかと年よる人や古曆

また「煤掃の説」をつくつて、

曙の空より、物のはたはたききこゆるは、疊をたたく音なるべし。けふは師走の十三日煤掃のこごぶきなり。けにや雲井の儀式、九重の作法は、嘉例あることにて、たどなみなみの人の煤はく體こそ、いとおもしろけれ。おのおの門さしこめて、奥のひとまを屏

風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、姫が帷子の上張、爪先みえたる足袋もいとさむく、冬の日影のはやく晝になりゆき、庭の隅、調度どもこりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるこそ、目にはたつなれ。家童の椽のやぶれ簀子の下をのぞきまはるは、何をひろふにやとあやし。味噌とよべる大男の、袋かぶり、簀きたるもめづらかに、米櫃の棧うちつけ、俎板しらせ、行燈はりかへて、たつくり、膾、淺漬のかをりはなやかにかみしもの膳するならべたるに、程なくくれて、高軒とはなりぬ。

煤はきやくれゆく宿の高いびき

かくて貞享三の年は、

月花とのさばりけらし年の暮

といふを總勘定として、のこりなくつきた。

五四 朝顔の畫讃

貞享四年元旦の句に、

元日やおもへばさびし秋の暮

世をわびてすむ芭蕉には、人のうきたつ元日からが、まことにさびしい、たとへば秋の暮のやうにさへおもはれた。

正月早々、嵐雪から小袖をおくつてきた。かうした人の誠のこもつたおくりものを、芭蕉は、つねに心の底からよろこんでうけた。

たれやらが姿ににたりけさの春

正月もすぎ、二月は梅のさくころ、門人の某が、奥州へくだらうとするこゝ、芭蕉は、これに餞して、

わするなよ藪の中なる梅の花

の一句をあたへた。貴人の庭園の梅の花でなく、富者の別業の梅の花でなくて、「藪の中なる梅の花」のものさびた姿こそ、芭蕉のもつて俳諧の生命とするこゝろであつた。

先年の野ざらしの旅に、熱田で知合になり、しばし旅寐をともした伊豆蛭ヶ島の僧が、おなじころ、これも奥州へくだるといつて、草庵へたちよつた。芭蕉は、これをおくるに、

またもとへ藪の中なる梅の花

といふ句をもつてした。

門人からは、諸所の花信がつたへられた。新開地の深川、本所には、みにゆく花もなければ、たゞよその花をおもひやるのみであつた。

『上野も、こゝ一兩日ですよ。』しらせるものもあつたが、芭蕉は、足をあけるのが臆劫であつた。くるゝにおそい春の日は、まだ西の空にたかいのに、夕暮つける鐘の音が、殷々としてひびいてきた。

花の雲鐘は 上野か 浅草か

岡目八目の理、世すて人なる芭蕉の眼には、世の中の有様が、さながらに映じた。それはあさましい世の中であつた。死ぬことをわすれた有象無象が、かみあひ、けあひ、つかみあつて、ひたすら一身の利をはかり、その一身が、朝露の一身であることをしらないもの、これが當世の人であり、これが當世の相であつた。芭蕉は、それをあさましとみた。

『世界はひろい。五尺の身一つをおくには、いたるこゝろ、その餘地がある。何も他人の邪

魔をせずとものごごぢやに……』と、世態人情を、にがにがしくおもつた。

花にあそぶ蛇なくらひぞ友雀

これには、「物皆自得」いふ題をおいた。

『物皆自得』と否とが、修羅と浄土のさかひ目ぢや。芭蕉は、かうおもつた。

多病の芭蕉は、初夏の頃から、またまた湯薬にしたしむ身となり、ものうくくらす日がつどいた。

病中自脈

髪おうて容顔あをし 五月雨

かうかいて、其角への消息にあてた。

じとじととふりつゞく五月雨の頃を、草庵にこもつて、病をやしなふ間にも、芭蕉の心はともすれば山水の景物をおうて、琵琶の湖畔に、甲斐の山中に漂泊した。

五月雨に鳩の浮巢をみにゆかん

ある日嵐雪が、唐紙にかいた朝顔をもつてきた。芭蕉は一見、

『随分まづい繪ぢやないか。』とわらつた。

『おそれいます。』

『しかしこの朝顔は、晝顔にも、夕顔にもみえるから重寶ぢや。一枚で三三ほりにつかへる繪はめづらしい。』

『實は、私がかきましたので……とにかく賛をねがひます。』

『よしよし！』と筆をとつて、

朝顔はへたのかくさへあはれなり

『これは、繪の賛ぢやないよ。朝顔の賛ぢやよ。』こんなことをいつて、またもわらつた。嵐雪も、頭かきかき、にがわらひした。

五五「養虫の音」

その嵐雪の濱町宅へ、ある日芭蕉から使があつて、

養虫の音をきくにこよ草の庵

かうした一句がつたへられた。「日頃は人のとひくるもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたたび心にちかふ」程のわび人芭蕉も、時々は無聊にたへかねて、人のこひしくなることがあつた。この時も、正にそれで、その心もち、嵐雪にもすぐわかつた。

『「養蟲の音」……養蟲がなくなかしら？……いや、さびしくてゐられるのだ。』といふと、早速濱町の宅をでた。

おもしろや、橋は、ふた國にまたがり、入江の釣舟は、横さまにうちこぞりぬ。鶯ねむり、鷗ながれつ。駿河の山は、いつこゝらきつらん、川隈おほふ程ちかし。

かうした隅田川をわたれば、師の庵が、芭蕉の葉蔭にみえがくれた。柴の戸の雪に、草履つめたくつとはいると、さながら人なきごこく、聲をかけても、何のこたへもなかつた。なれたこととて、嵐雪は、かまはず座敷へあがつた。座敷には、主の芭蕉が、あだかも養蟲の聲をきく人のやうに、たゞ黙然とすわつてゐた。

『いかゞです？ きこえますか、養蟲の音は。』

『今になくよ。』といひながら、芭蕉は、座をたつた。その様子は、よわよわしい中に、どこ

か凛としてをかしがたいごころがあり、たゞへば菊の霜におごるがごとく、柳の風にめけぬがごこくで、まことにたふとくあふがれた。

時に芭蕉がきてゐたのは、もみにもまれた古紙子で、足のふむところ、手のうごくところ、ごそとの音もなかつた。

『だからこそ、養蟲の音もきこえるのだ。』嵐雪は、ひとり心にうなづきながら、それでも、ちよつと耳をすましてみた。果然ちよつとも、はよつとも、養蟲はなかなかつた。

『私のやうな天性のさわがしいものには、きくこともみることもできませんまい。先生にきこえるのは、養蟲の情に閑人のしづかさどが、びつたりとふれあふからでせう。しかし二つをくらべるごになると、養蟲の情よりも、閑人のしづかさどが、たちまさつてゐるに相違ありません。』といつて、庭の方へむきなほり、

『養蟲よ、先生がおやかましいぞ。なくな。』とたはむれ、

何の音もなし稲うちくうて蝨かな

養蟲のなかないことは、最初からわかつてゐた。なかないごしりつゝ、耳をすます。そこ

にはいひしらぬ閑寂さがあつた。事實に蓑蟲の音をきくよりも、それをきかうとする物しづかなおもむきが、芭蕉にはうれしかつた。花に對し、月にむかふ時よりも、蓑蟲をきかうとする刹那において、芭蕉の心は、寂靜の極致におちついてゐた。

小名木川の上流にすむ素堂は、この話をきくと、非常に興のあることにおもつて、「蓑蟲の說」一篇をつくつた。

蓑蟲々々、聲のおほつかなきをあはれぶ。ちよちよとなくは、孝にもつばらなるもの、いかにつたへて鬼子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも、瞽叟を父として舜あり。汝は、蟲の舜ならんか。

蓑蟲々々、聲のおほつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松むしは、聲の美なるがために、籠中に花野をなき、桑子は、絲をはくによりて、からうじて賤の手に死す。

蓑蟲々々、無能にしてしづかなるをあはれぶ。胡蝶は、花にいそがしく、蜂は、蜜をいとむにより、往來おだやかならず。たれがためにこれをあまくするや。

蓑蟲々々、かたちのすこしきなるをあはれぶ。わづかに一滴をうれば、その身をうるほ

し、一葉をうれば、これがすみかみなれり。龍蛇のいきほひあるも、おほくは人のために身をそこなふ。しかじ、汝がすこしきなるには。

蓑蟲々々、漁父が一絲をたづさへたるに同じ。漁父は、魚をわすれず、風波にたへず。

幾度かこれをときて、酒にあてんとする。太公すら、文王をつるのそしりあり。子陵も漢王に一味の閑をさまたけらる。

蓑蟲々々、玉蟲ゆゑに袖ぬらしけん、田蓑の鳥の名にかくれずや。いけるもの、たれかこのまどひなからん。鳥は、みてたかくあがり、魚は、みてふかくいる。遍照が蓑をしほりしも、ふるつまをなほわすれざるなり。

蓑蟲々々、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて、定家の心をおこし、秋は萩ふく風に音をそへて、寂蓮に感をすむ。木がらしののちは、空蟬に身をならふや、骸も身も共にすつるや。

畫家の朝湖、これまた興あることにおもつて、つひに蓑蟲の繪をつくり、草庵へおくつてきた。

こゝにいたつて、芭蕉も一言なきをえないことになり、これが跋文を草した。文中、まづ素堂の文をほめ、さらに朝湖の繪におよんで、

まことに丹青あはあはしく、情こまやかなり。心をとどむれば、蟲うごくごごく、黄葉おつるかとうたがふ。耳をたれてこれをきけば、その蟲聲をなして、秋の風そよそよとさぶし。

このへ、最後に、

なほ閑窓に閉をえて、兩士のさちにあづかそこと、蓑蟲のめいほくあるにいたり。とむすんだのは、騒人一場のたはむれながら、まことに風雅のきはみであつた。

五六 「草庵の月見」

嵐雪は、間もなく四國へ旅行した。芭蕉は、

旅がらす二百十日も 船支度

の一句をあたへて、餞した。

ある日の夕刻、其角、仙北の二人が、草庵をおとづれて、月見にさそつた。船の準備もできるとのことであつた。無聊である芭蕉は、

『月見？ それは面白い。』と、そのまゝ二人に案内されて、萬年橋袂から船にのつた。

船は、たちまち隅田川へとこぎだされた。時は秋、たかくはれわたつた空には、一痕の月がさえにさえて、星影さへもまれであつた。白銀くたく水の上を、こぎのほり、こぎくだる前には、鶉が聲もなくはたはたと飛んだ。兩岸の屋敷々々は、たゞ一様に黒ずんで、家々からは、燈火がほのかにみえた。

『これは愉快ぢや。』芭蕉は、杯をあけながら感嘆した。

『まつたく愉快です。』

『時に、一句いかゞです？』

『あまり月がよいものぢやから、その方へ心をすひとられてしまつて、なかなか句案どころぢやない。』

『手前などは、なほさらです。』

『つまり景色におされるんだね。』など、師弟三人がはなしあつてゐるに、仙北のつれた従者の半四郎といふもの、舳のかたに酒をあたゝめなどしてゐたのが、

名月は汐にながるゝ小舟かな

と、これはまた名句をはいた。むかし俊綱朝臣の館で、「水上月」といふ題がでたとき、田舎から使者にきてゐた青侍が、

『某も一首いたしませう。』といつて、

水や空そらや水ともみえわかずかよひてすめる秋の夜の月

と詠じ、諸人をおどろかしたといふが、それと目をおなじうすべき談であつた。三人は、つくづくと感心して、爾來吼雲ミ緯名し、半四郎とはよばないことにした。

その夜庵へかへつてのちも、芭蕉は、頭がさえるのみで、褥へはいる氣になれなかつた。庭下駄をはいて、ふたゝび月下にたつた。そして池の畔をあちこちとあるいてみた。風もなければ波もない池には、月がさながらにうかんで、そのすみきつたさまは、たゞちに美そのものであつた。なかばかれかゝつた葦や雑草の中には、虫の聲がしきりにきこえた。その葦

その虫の音も、常とは一段美化されてゐた。

『月光の中には、何一つみにくいものはない。すべてが美ぢや。』芭蕉は、つくづくと感心した。

『我々俳人の眼には、花鳥風月、事々物々、一として俳諧ならぬはない。それと同様、月の光にてらされては、一物として美ならざるはない。月は、萬物を美化する。それは、おほきな俳人ぢや。いや、無二の藝術家ぢや。』こんなことをおもひながら、夜のふけるのもうちわすれて、あくまで月の光にひたつた。

名月や池をめぐりて夜もすがら

芭蕉は、時にえたこの一句に、「草庵の月見」と題した。

五七 鹿島の月見

江上の月見について草庵の月見。けれど、芭蕉は、なほ月にあきなかつた。たゞにあきなかつたのみではなく、月に對するこひごころが、いやましつにつて、さらに鹿島の月見をお

もひたつた。海邊大工町の臨川寺にゐた佛頂和尚も、先年の火災にあつた一人で、それ以來鹿島へかへり、根本寺の住職もやめ、麓の小寺へしりぞいて、悠々たる閑日月をおくつてゐた。その訪問をかねて、鹿島の山の月をみやうと、さういふ計畫であつた。

洛の貞室、須磨の浦の月見にゆきて、

松陰や月は三五夜中納言

といひけん、狂夫のむかしもなつかしまゝに、この秋、鹿島の山の月みんとおもひたつことあり。ともなふ人二人。浪客の士ひとり、一人は雲水の僧。

いはゆる「浪客の士ひとり」は、近所にすむ曾良であつた。「僧」は、これも近所にすむ宗波であつた。突嗟のおもひたちとて、近所にすむものだけででかけたのであつた。

浪客の曾良は、わかつてゐる。宗波は、鴉のやうな墨の衣に、三衣の袋を袴にうちかけ、出山釋迦の像を厨子にあがめいれてせおひ、杖ひきならし、天地獨歩のいきほひ猛に、

『何、無門の關も一ミやぶりぢや。』とわらつた。

『そこで、このわしは、僧でもなく、俗でもない、鳥鼠のあひだをゆく蝙蝠かもしれぬ。』

鳥なき島へわたるころぢや。芭蕉は、かういつてわらつた。

庵の前から船にのつて、小名木川をさかのほると、下總の行徳までは、ほんの一時の間であつた。行徳で船をすて、

『駕籠にしませうか。』

『馬はいかゞで？』

『いや、あるくとしやうよ。細腰の力をためすのも一興ぢや。』芭蕉の言葉に、各自甲斐の國の人からおくつてきた檜笠をかぶり、足の草鞋をふみしめふみしめ、心もかるく徒歩で出發した。

途すがら「八幡しらすの藪」で名のある八幡の里をすぎ、ゆきゆく程に、鎌ヶ谷へでた。このあたりは、秦甸の千里ともいひたいくらのひろい野原で、野原をこえてはるかの方には、二峰ならびたつた筑波の山が、たかくみわたされた。

『かの唐土に、双劍の峯ときこえたのは、盧山の一隅ぢやけなが、その形は、多分この筑波ににとるのぢやらう。』芭蕉は、こんなことをおもつた。盧山の名から香爐峯を聯想し、

香爐峯の雪、簾をかゝけてみる。

といふ句をふまへて、

雪はまをさすまづ紫のつくばかな

と詠じた其角の句も、おもひおこされた。

そもそもこの筑波山は、むかし日本武尊が、

にひばりつくばをすぎて幾夜かねつる

ごあふせられたお言葉をつたへて、連歌のはじめとする。

『なるほど歌がなくてはすまぬ。句がなくてはすぎがたい。まことに愛すべき山の姿ではある。』などおもひつゞけ、芭蕉は、しきりに感嘆した。

しかもそのみではなかつた。萩は、錦を地にしいたやうで、むかし爲仲が、をりとつて長櫃にいれ、都への土産にもたせた風流も、にくからずおもはれた。萩にまじつて、桔梗、刈萱、女郎花、尾花などがさきみだれ、小男鹿の妻こひわぶる聲さへ、あはれにきゝなされた。その中を、野の駒がところえ顔にむれあるくのも、まことに興ぶかいながめであつた。

日のやうやくくれかゝる頃、利根川のほとりの布佐へたどりついた。布佐には、網代といふものを工夫して、川をのほる鮭をとり、江戸へうりだすものがあつた。宵の程は、その漁家へはいつて、足をやすめた。

『漁夫の家でも夜をあかして、明朝はやく利根川をくだりませう。』途々こんな話をしてきたが、夜の漁家のなまぐささには、ごてもとまる氣になれなかつた。をりから月の隈なくはれたのに心をうごかさされ、夜船をさしくだして、一路鹿島へむかつた。

月下の利根川、浩々として涯しらぬ水の上に船をうかべ、一葦のながれるにまかせる心もちは、何ごもいへずうれしかつたが、翌日は午時からの雨、しかもひどい雨で、月みるべくもなければ、三人は、一様に失望しながら、ぬれそほつた體を、佛頂のすむ寺へはいつた。

五八 雨後の月

佛頂は、機嫌よく三人を方丈へとほして、

『これはようこそ！……例の俳諧行脚といふわけで？……』

『いや、月見にまゐりました。』

『月見？ 雨中の月見はめづらしい。』

『あいにくの雨で、残念いたします。もつとも、昨夜は、月の利根川をくだりましたから、うめあはせはつきますがね……』など、わらひばなしに時刻をうつし、夜になると、こうて床をとつてもらひ、

『では、おきて月をみるかはりに、ねて雨をきくとしませう。』と、三人は、枕をならべてうちふした。

うちふしながら、おもへばこゝは大徳の寺である。禪のこゝなどをかんがへる程に、芭蕉は、しばし清淨の心をえた感があり、

欲_レ覺_聞朝鐘。 令_{三人}發_深省。

といふ杜子美の句さへ想起された。

昨日からのつかれに、三人とも、ぐつ_{すり}と一とねいりすると、曉ちかい頃、佛頂がやつてきて、

『おきられよ、おきられよ。陰晴さだまらぬ秋の空、今すこしはれたやうぢやから……』といふに、

『さやうか。』とのみ、三人は、いそぎおきだした。をりから雨の音はきこえながら、西にかたむいた月の光のあはれさ、みるからに胸は一杯で、芭蕉をはじめ、何こいふべき言葉もなかつた。

すると佛頂が、

『雨後の月は格別ぢや。あの雲が……』といひながら、

をりをりにかはらぬ空の月影もちよのながめは雲のまにまにこ、まづ一首の歌を詠じだした。芭蕉は、これに力をえて、

月はやし梢は雨をもちながら

寺に寝てまここ顔なる月見かな

つゞいて他の二人も、

雨にねて竹おきかへる月見かな

會 良

月さびし堂の軒端の雨しづく

宗波

遠來の勞は、かくてからうじてむくいられた。

歸路は、潮來に道悦をとうた。道悦は、醫を業とし、かつて江戸にある際、かたはら俳諧を芭蕉にまなんで、自準と號した。芭蕉はまた、自準から醫術をまなんだ。

相傳の醫術啓迪院一流の秘書、秘語、なんぞ他にもらさんや。もし違背するにおいては大小神祇、別して生縁の氏神おん罰かうむるべきものなり。よりて起請文件のごとし。

貞享三丙寅年四月十二日

物部 道意 (判)

松尾 芭蕉 (判)

本間 道悦様

といふ誓書をさしいれたくらゐで、單なる好奇心からではなかつたが、さいつて醫者になるかんがへがあつたわけでもなく、自分が多病でゐるところから、一とほり醫術をしつておきたいとまでにおもつたのであつた。

自準は、よるこんで芭蕉をむかへ、

塙せよわらほす宿の友雀

といふ句を呈して、ゆつくり逗留せられたいよしをつけた。水郷の秋には、

賤の子や稻すりかけて月をみる

などの風景もあつて、芭蕉の氣にいつた。自準の句に、

秋をこめたるくねの指杉 芭蕉

月みんと汐ひきのほる舟とめて 曾良

こつけ、數日その家にとどまつて、さてのち江戸へかへつた。

鹿島ゆきのこきは、やがて一篇の紀行文につくられた。芭蕉は、それに「鹿島詣」の題をついた。

五九 其角の「續みなし栗」

京都の去來から、「伊勢紀行」さいふをおくつてきた。芭蕉が鹿島へ月見にいつた頃、去來

は、妹千子とごもに、伊勢參宮をした。その道の記で、

白川の屋根に石おく秋の風
秋風も心まゝなりにほの海
秋の夜もねならふ旅のやどりかな
奥山や五聲つゞく鹿をきく
馬の口よくとれ霧の谷ふかし
朝霧やところのものに雨とはん
といふやうな去來の句、

伊勢までのよき道づれよ今朝の雁
霧よりはこなたへひろしにほの海
ながき夜も旅くたびれにねられけり
萩すゝき山路をいづる笠おもし
泊こまり稻する唄もかはりけり

芝草の露もちかぬるそだちかな

といふやうな千子の句がみえた。芭蕉は、その奥に、

ひとたび吟じて、感をおこし、ふたゝび誦して、感をわする。三たびよみて、その無事なることをおほゆ。この人、この道にいたれりつくせり。

東西のあはれさひとつ秋の風

などかきそへて返送した。

芭蕉の俳諧は、これを前にしては、「枯枝に鳥」の句において、これを後にしては、「古池」の句において、それぞれ一轉期を劃した。かくして到達しえた結論は、俳諧の生命は、閑寂すなはちさびにあつて、さびは、眼前の光景、目下の事實にある。目下の事實を詠じて、しかもさびをうしなはなければ、景情かねそなはるところの、まつたき俳諧が、その間にうまれるこゝ、かういふことであつた。

であるから、さびすなはち情をえるこゝにもつばらで、ために事實すなはち景をまけたりわすれたり、理屈をまじへたり、感想めいたことをのべたりするのも不可、事實をつかむに

急で、さびもしをりもおいてとはず、たゞの叙景になるのも不可、俳諧の本意、俳句の本意は、その中間にあるのであつた。

芭蕉自身の句も、「枯枝に鶉」以前のものには、さびのないのが、大部分をしめ、そのうち「古池」までのものには、往々事實をまけたのがあつた。かれも、これも、芭蕉のみづからかへりみて遺憾とするところであつた。

下臥につかみわけばや絲ざくら

芭蕉、ある時、去來ミ道をゆきながら、この句をあけて、

『これは、其角の集にみえてをる。何とおもつて、入れたのかしら？』と不思議顔をした。

『絲櫻のさかりにさいた形容として、よくいひをさせてるやうですが……』

『いひをさせて何がある？』芭蕉のこの一言、ふかく去來の肝に銘じ、おなじ景にも、句になるのミ、句にならぬのミのあることをしつた。「下臥」の句は、いひをさせてはる。叙景としては充分である。かなしいかな、たゞそれだけで、さびといふがない、閑寂のおもむきさいふがない。芭蕉は、その點を指摘したのであつたが、かれ自身にも、情景いづれかの一

偏に墮した句があつた。

しかるに、さうした缺點は、「枯枝に鳥」の句から「古池」の句におよんで、全然とりのぞかれた。いはゆる正風の基礎は、完全にさだまつた。と同時に、門人の句風も一變して、景のうちにはさびのあるのが、おほくなつてきた。

こゝにおいて、門人中の第一人者其角は、この際、それらの句をあつめて世にとひ、蕉門の主張をあきらかにする必要のあることを痛感し、すぐる日以来、「續みなし栗」の編輯に着手してゐたが、この頃にいたつて、ほど完成した。

よくみれば薺花さく垣根かな

ながき日をさへづりたらぬ雲雀かな

郭公なきなきとぶぞいそがはし

卯の花も母なき宿ぞすさまじき

四月八日、其角の母がしんだ。この句は、その五七日追善會の詠で、

香きえのこるみぢか夜の夢 其角

いろいろの雲をみにけり月すみて

嵐雪

さつゞけられた。

おきあがる菊ほのかなり水のあと

やせながらわりなき菊の苔かな

などの外、「古池」以後「月はやし」以前のおもなる句が、數多そのうちへとりいれられた。序文は、素堂がかいた。その一節に、

古人いへることあり、景のうちに情をふくむと。から歌にていはど、

穿_レ花 映_レ蝶 深々見 點_レ水 蜻_レ蜓 歎々飛。

これ胡蝶と陽炎は、ところをえたれども、老杜は、他の國にありて、安からぬ心こや。まことに景のうちに情をふくむものかな。やまと歌、かくぞあるべき。またきよしことあり、詩や、歌や、こゝろの繪なりと。「野渡人なうして、船おのづからよこたはる、」

「月おちかゝる淡路島山」などのたぐひなるべし。まさにこれ、蕉門最近の傾向を指摘し、主張を道破したのであつた。

六〇 旅は道場

芭蕉は、またまた旅をおもふやうになつた。特に旅をおもふのみではなく、諸行無常の理において、ふかく會得するところのあつた芭蕉のためには、人の一生からがすでに旅で、故郷にあつても、芭蕉庵にあつても、そこを永住の場所とはおもはず、旅のやどりの心得でゐるが、なほその上に、芭蕉は、人事をいとつた。人事をいとふものが、自然を愛し、自然にしたしまんがために、旅をおもふのは、當然の成行である。さきには、野ざらしの旅に、九個月のひさしき、自然にしたしんだその興趣は、芭蕉のわすれえないところであつた。今また鹿島まうでに、曉の月のあはれさをめで、自準邸の數日に、田舎の長閑さにひたるにおよんで、芭蕉の旅をおもふ心は、頓に痛切をくはへてきた。

が、芭蕉が旅をおもふやうになり、おなじ貞享四年の冬、故郷へかへつたのはをじめに、爾後の約十個年、その過半を旅にすごし、とゞ旅にやみ、旅にをはるにいたつたについては今一個條の理由があつた。

『旅は、俳諧修行の道場ぢや。』芭蕉は、かうかんがへてゐたのであつた。
であるから、つねに門人にをしへて、

『東海道の一と筋もしらぬ人には、風雅の道も覺束ない。』といつた。門人またよくこの教誡をまもつて、おこたらず旅をし、諸國へ行脚の足をのばした。

たとへば、其角のごとき、芭蕉の俳諧が、田舎、山林のものであつたならば、其角の俳諧は、都會、人間のものであつた。江戸にうまれて、江戸に人となり、しかも江戸人たることにほこりを感じてゐた其角は、このんで都會の句をよんだ。都會の句ならぬものも、雄放をきはめ、華麗をつくし、もつばら氣をもつて主としたところは、かれや到底都會の俳人であつたが、なほかつしばしば旅にでかけ、京へのほることも、數次におよんだ。これ畢竟芭蕉の教誡をまもり、また旅が俳諧修行の道場であることを、みとめたからのことであつた。

しかも、「旅は俳諧修行の道場」といふ芭蕉の見込は、十二分にあたつてゐた。其角の句が芭蕉と調をことにしながら、雄放のあひだに、さびをつみ、華麗のうちにしをりを存して、蕉門の高足、正風の嫡流たることをうしなはなかつた所以は、これを旅にえたのであつた。

『旅は修行の道場といふこと、なるほど相違はない。』と、其角はおもつた。

『禪僧もよく行脚する。世に行脚しない俳人があるなら、行脚しない禪僧もあるだらう。けれど祖師西來の意は、その了解しえないところであり、正風のさび、しをりは、その會得しえないところであるに相違ない。かくても俳人と號し、釋子と稱するのは、あまりにをこがましい。』かうもおもつた。

であるから、許六のそしりは、おそらく其角の首肯しえないところであつた。

晋子は、作をこのみて、己が一風をたてたり。なほ頃日の風體は、俳諧の名をおきて、餅とも酒ともあらためたらんに、何のうたがひあらん。

といひ。

其角は、へたではなし。先師の口癖は、よくまねける。芭蕉流にはあらず。

といつたのは、其角にとつて、あまりに淺薄な評であつた。俳人ならぬ梁田蛻巖が、けだし、よく翁の心をえて、翁の跡をふまざるもの。これまた世俗境中の人にあらず。と評したのこそ、その合點しうるところであつた。

さばれ、芭蕉のみるところ、旅は、俳諧修行の道場であつた。しかもその見込は、あたつてゐた。そのあたつてゐたことは、芭蕉自身これを證明し、門下の共角これを證明し、去來抄にみえる野明のこと、またこれを證明した。

駒かひにでむかふ野邊のすゝきかな 野明

去來いはく、駒かひに人のでむかうたる、野邊の薄にや。またはすぐに薄の風情にや。野明いはく、薄の上なり。去來いはく、はじめより、さはきゝはべれど、吾子の俳諧、かく上達せんまはおもはざりしゆゑ、たゞおどろきいりはべるのみ。支考いはく、句の秀拙はともかくも、野明の場をしらるゝこと、いと不審なりと感吟す。予この人ををしふること年あり。かつて通ぜず。一ミせ先師二十日ばかりの旅寢に供せられしより、拔群上達せり。常に俳友なく、修行むなし。しかれども、先師をはじめ、文章、支考など折節會吟して、外のわる功者をしらぬ故、おのづからかゝる句もできめり。まことに手筋をたふとむべし。たゞ平生作意のよわきを難とす。

芭蕉は、つとにこの間の消息を看破してゐた。常に旅をおもひ、晩年の過半を行脚につひ

やしてくいなかつた一理由は、またこゝにあつた。

六一 「行脚の掟」

芭蕉の旅は、俳諧修行のための旅であつた。その行脚は、杜子美の風骨をさぐり、西行法師の寂寥をたどらんがための行脚であつた。ひとへにさびしをりをうしなふまいとしたことは、いふまでもなく、かつて制した「行脚の掟」にも、

一、一宿なすとも、故なきに再宿すべからず。樹下、石上にふすとも、あたゝめたる筵とおもふべし。

一、腰に寸鐵たりとも帯すべからず。總じて物の命をとることなかれ。

一、君父の驛あるところには、門外にもあそぶべからず。俱に天をいたゞかざる、しのびざる情あればなり。

一、衣類、器財、相應にすべし。すぎたるはよからず。たらざるもしからず。程あるべし。

一、魚鳥獸の肉をこのんでくふべからず。美味珍食にふける人は、他事にふれやすきものなり。菜根をかんで百事をなすべき語をおもふべし。

二、人のもとめなきに、己が句をいだすべからず。のぞみをそむくもしからず。ミはざるにときは、とくにあらず。とふにこたへざるは、よろしからず。

一、たとひ嶮岨の境たりとも、所勞の念をおこすべからず。おこらば、中途よりかへるべし。

レ、馬、駕籠にのることなかれ。一枝の枯杖を己が瘦脚におもふべし。

一、このんで酒をのむべからず。饗應により固辭しがたくとも、微醉にしてやむべし。亂におよばずの禁あり。祀歳の戒、祭に酷をもちるも、忍へるをにくめばなり。

一、船錢、茶代、わするべからず。

二、他の短をあけて、己が長をあらはすことなかれ。人をそしりて、おのれにほこるははなはだいやし。

一、女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬことなり。この道に親炙せば、人をしてつたふべし。總じて男女の道は、嗣をたつるのみなり。流蕩すれば、心淳一ならず。この道は、主一無適にしてなす。よくおのれをかへりみるべし。

一、主あるものは、一枝、一草たりとも、とるべからず。山川、沼澤にも主あり。つとめよや。

一、山川、舊跡、したしくたづねいるべし。あらたに私の名をつくることなかれ。

一、一字の師恩たりとも、わするべしことなかれ。一句の理をだに解せず、人の師なることなかれ。人にをしふるは、おのれをなしてのちのことなり。

一、一宿、一飯の主も、おろそかにおもふべからず。さりとして、こびへつらふことなかれ。かゝる人は、世の奴なり。この道にいるものは、この道の人にまじはるべし。

一、夕をおもひ、旦をおもふべし。旦暮の行脚といふことは、このまざることなり。人に勞をかくることなかれ。しばしばすれはうとんぜらるゝの言をおもふべし。はた、飽食たりとも、このむべからず。

一、俳談の外、雑話すべからず。雑話いでなば、みねむりして勞をやしなふべし。右之條々、わが門の行脚は、つゝしむべきなり。當時を見るに、かくのごとき掟をまもりて行脚する俳客、一人もなし。不相應に美をかざり、利欲のためにいつはりをいひて世をわたる。淺ましからずや。あるひは古人の名をうり、自己の勝手のよきやうにいひちらすは、まことに羊頭をかけて狗肉をうるの徒にして、切賣の功者といふべし。とみえた。これほとんど禪僧などの雲水生活をこつて、一門に擬し、みづからつみめるに同時に、門下をいしましたのであつた。一見あまりにさびしい行脚ぶりのやうであつたが、『これではなければ、旅も修行の道場にはならぬ。』芭蕉は、かうおもふのであつた。

六二 送別の連句俳句

芭蕉が、野ざらしの旅、鹿島まうでについて、今度またまた旅をおもふやうになつたについては、以上の外、別に一二の理由があつた。先年の歸郷に、かはりはたわが家、わが郷をみ、ことには兄のをいた姿を目にして以來、芭蕉が故郷をおもふ情は、前に倍してふかく

なつた。雨につけ、風につけ、芭蕉の心は、つねに故郷の空にあつた。

『兄上は、どうせられたかしら？ 無事であつてくださればよい。兄上は、おひおひ年をこられる。自分は、このとほり體がよわい。おたがひの身の上に、いつ何事がおこらうもしれぬ。親なきのちは、兄を親とするといふが、自分は、あまりに兄上にそむいてをる。今一度無事なお顔を拜したい。しかしう、かうかしてをると、その機を永久にうしなはうもしれぬ。』かうおもつたことが一つ。野ざらしの旅には、尾張、美濃、江州へわたつて、數多の門人へえた。それらの門人からは、しばしば懇切な書状をよせて、芭蕉の出馬をうながしてきた。芭蕉としても、ふたゝびかれらに面會して、その進境もしりたし、指導もしたし、おもつてゐたこと、これも一つ。それやこれやで、芭蕉が旅をおもふ心は、近來はなほだ痛切になつてきた。

鹿島まうでののち二個月、芭蕉は、つひに故郷へ旅だつことになつた。門人らは、寒中の長旅行を一入懸念がつたが、雪霜になやまされた自然のさびしみ、木枯にふかれゆく旅中のあはれさが、何とらいへずなつかしいものにおもはれたのであつた。

こゝにおいて、門人らは、師の首途を壯にするために、あるひは送別の句會をまうけ、あるひは饒別の品をおくつた中に、さきに談林派からうつした活公は、九月下旬、芭蕉をはじめ、その門下の數人をまねいて、邸内の傍池亭に別筵をひらいた。席上、公は、

時は冬吉野をこめん旅のつと

なる句をおくり、一同の間には、歌仙がおこなはれた。

ついで十月十一日には、芝の其角方で、おなじく別筵があり、

旅人とわが名よばれん初時雨

といふ芭蕉の句をうけて、

またさゞん花を宿々にして

と由之が脇をつけた。それについで、

鶴鶴の心ほど世のたのしきに

かてをわけたる山陰の鶴

かけありく芝生の露の浅みどり

其角
杉風
文鱗

あたらし舞臺月にまはゞや
中の秋畫工一とつれかへるなり
鱸てうしておくる漢舟
神垣を次第にひゞく波のひま
齡ミをしれ君が若松
これに擧白もくはゞつて、都合十一人の歌仙があつた。
素堂は、烏巾にそへて、

仙化
魚兒
觀水
全峰
嵐雪

もろこしの吉野の奥の頭巾かな
といふ句の外、詩三首をおくつた。

留守のうちなほやせぬべし冬の菊
木枯のふきゆくうしろ姿かな
なく千鳥富士をみかへれ鹽見坂
ころしもや大井の嵐小夜の霜

不ト
嵐雪
杉風
蚊足

橋までは供してふまんけさの霜
 旅寝さぞ紙に二つはなからまし
 朝毎の紙にやおもき霜の松
 ぬきんでておくりまをさん時雨かな
 時雨々に鑑かりおかん草の庵
 箱根山しぐれなき日をねがひけり
 蒲團かす女もあらじ旅の宿
 萩かれぬむつの紙絹みやこまで
 宿はづれ霜きゆる間に朝茶めせ
 冬の日をなほしたはるゝほまれかな
 冬がれを君が首途や花の雲
 などの句もあり、それぞれ借別の意をいたした。
 その他数ある門人、知人の中には、あるひは詩歌、文章、俳句などをたづさへて、草庵を

仙 化
 枳 風
 李 下
 文 鱗
 舉 白
 山 之
 露 荷
 沾 蓬
 如 泥
 溪 石
 共 角

さふものもあり、あるひは紙子、綿子をおくつて、霜雪の苦をいたはるものもあり、あるひは、草鞋の料を紙についで、志をしめすものもあり、莊子には、
 千里に旅する者は、三月糧をあつむ。
 とあるが、芭蕉の旅仕度は、一芥の勞をつひやさずして、たちまちの間にとゞつた。
 芭蕉は、みづから世すて人のつもりでゐた。ある人たちのみたとほり、世の無用人のこゝろえでゐた。したがつて、かくさかんにおくられることは、そのはなはだ意外とするところであつた。

ゆるある人の首途するにもにたりき、物めかしくおほえられけれ。
 その旅の道の記「笈の小文」に、芭蕉は、かくこしるした。
 なほ上掲送別の連句、俳句は、間もなく上梓された其角の「續みなし栗」のうちに、全部採録せられて、ながく同人のおもひで草となつた。

六三 尾州鳴海まで

貞享四年冬十月、しかもその二十五日といふに、芭蕉は、江戸を發足した。志のある門人には、いづれも途中までみおくれた。いざとわかれゆく師翁のうしろ姿の、そのよわわしい様子をみるにつけ、長途の困難をおもひやつて、涙ぐむものもあつた。

たゞ一人、老の袂を木枯のふくにまかせてたどるとき、芭蕉は、しみじみと「自分」といふものがかへりみられた。

百骸、九竅の中に物あり、なづけて風羅坊といふ。まことに羅の風のやぶれやすからんことをいふにやあらん。かれ、狂句をこのむことひさし。つひに生涯のはかりごことなす。ある時は、うんで放擲せんことをおもひ、ある時は、すゝんで人にかたんことをほこり、是非胸中にたゝかうて、これがために安からず。しばらく身をたてんことをねがへども、これがためにさゝへられ、しばらくまなんで、愚をさとさんことをおもへども、これがためにやぶられ、つひに無能無藝にして、たゞこの一筋につながる。

かうおもふと、みづからあはれむの情なきをえなかつた。が、その中からも、

『さいつて、名利の生活は、自分のたへうるところぢやない。無常流轉中のものなる人間に名利が何であらう？ 一身が何であらう？ 人間の力が何であらう？ 人間はちひさく、自然はおほきい。人間のなしうるところは、一身をこつて自然に還没し、無我無心、造化にしたがふにある。造化とともにあそぶにある。人間これにまさるの大事業はない。これに比すれば、名をあけるとか、利をえるとかいふことは、人間の仕事として、あまりにちひさい。これをおもへば、自分が今、風雅の一筋につながつてゐるのは、決してくいるべきことではない。このうちにこそ、自然にしたがひ、造化にかへるの道があるのぢや。』とおもひかへしなどした。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪に於ける、利休の茶における、その貫通する物は一なり。しかも風雅に於ける、造化にしたがひて、四時を友とす。みるところ、花にあらすといふことなし。おもふところ、月にあらすといふことなし。おもひ月にあらざるときは、夷狄にひとし。心花にあらざるときは、鳥獸にたぐひす。夷狄をいで、禽獸をはなれて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

『自分が今かうして旅中をさまよふのも、造化にしたがひ、造化にかへる工夫ぢやないか。』
こんなことをおもひつゞける程に、芭蕉は、いつしか自然の大景中にすひこまれていつた。
自分の造化々育の中の一物であることが、身にしみじみと感得せられ、やゝもすれば、茫然
としてみづからうしなはうとした。

富士は、まつ白になつてゐた。

一尾根は、しぐるゝ雲か富士の雪

果然しぐれてきた。

初時雨しづかにわたれ桂川

野ざらしの旅には、尾州鳴海の知足をとつて、そこに幾日かを逗留した。同地には、その
際門下にはいつたものに、知足の外、業言、如風などの數人があつた。そのうち業言は、旅
館をいさなみ、土地の舊家で、「鳴海の本陣」としられてゐた。かねて書面の次第もあり、今
度は、同家へこまることにした。

時に業言は、一本の軸を借りだして、芭蕉にしめした。それには、「都もとほくなるみがた
はるけき海を中にへだてよ。」といふ飛鳥井雅章公の歌が、公の自筆でかゝれてあつた。

『先年關東へくだられますをりに、手前どもへとまられました、すなはちこの歌をおかきく
だされました。』業言は、かうつけたした。

旅にあつて、旅の歌をみ、しかもその旅人のとまつた宿にとまりあはせた奇縁をおもふと
かれは江戸へくだる人、われは江戸をでてきた身、むかふところは正反對ながら、芭蕉は、
感多少ならざるをえず、

京まではまだ半空や雪の雲

『爲章公にも、前途程さほしの心地があつたぢやらう。』かういつて、そのときの公をしのん
だ。

鳴海の附近には、呼續の濱、星崎、笠寺などの名所があつた。一日芭蕉は、業言、知足な
どに案内せられて、それらの名所をみてまはつた。呼續の濱で日をくらし、笠寺へくると、
雪がふりだした。その雪中、ちいちいとなく千鳥の聲が、海の方からきこえてきた。

星崎の闇をみよみやなく千鳥

ある日は、ある方へまねかれて、

初時雨初の字をわが時雨かな

六四 伊良古崎へ

鳴海から熱田へは一里半、すぐその先が名古屋である。業言や知足は、熱田、名古屋の同人の消息を、何くれとものがたつた中に、もつこも芭蕉をおどろかしたのは、名古屋の杜國が、罪を藩侯にえて、目下伊良子崎の附近保美の配所に謹慎してゐることであつた。

『一旦死刑ときまつたのが、

蓬來やみくにかざり檜やま

杜國のこの句が、藩侯のお耳へはいりますと、御感のあまり、罰一等を減ぜられて、流罪となつたのださうです。』といふものもあつた。

『その保美とやはは、こゝから何里程あるのかしら？』

『二十四五里もありませう。三州吉田から右へ、渥美半島のつさきが伊良子崎で、そのつ

ひ手前ださうです。随分ひどいところのやうにきいてをります。』

杜國にどんな罪があつたのか、その次第をしるよりも、さうした偏鄙へながされてゐるわかい俳人の運命が、芭蕉にはいたましかつた。先年江戸へかへるとき、「白芥子に羽もぐ蝶のわかれかな。」といふ、われながらいたましい句をよんで、かれにあたへたことなどを追想するに、當時すでに今日の豫感があつたのではないかと、つひそんなことさへおもはれた。

『それは氣の毒ぢや。さぞくるしい目をしとるぢやらう。たづねてやりたいが、たれか一緒にゆくものはないかしら？』處が處、道が道とて、弟子おもひの芭蕉も、單身それへむかふことには、やゝすこしく危惧を感じたのであつた。

一考ののち、熱田の越人へむけて、一書をしたゝめた。越人は、即刻やつてきた。道づれはできた。芭蕉は、この初對面の越人とともに、鳴海を發し、あこへひきかへすこと十里ばかり、その夜は、吉田に一泊した。

さむけれど二人ねる夜ぞたのもしき

翌朝は、馬ででかけた。吉田から保美までの十里あまりは、磯にそうた田の中の細道をた

どろので、その困難は一とほりではなく、徒歩ではとてもその日の中にゆきつかれないところ
とに、やむなく馬をやとつたのであつた。

なるほどわるい道であつた。それに海からふきあける風のさむいのがたまらなかつた。

冬の日や馬上にこぼる影法師

あまりのさむさに、二人は、途中の掛茶屋へはいつて、酒などを命じた。越人は、しきりに杯をあけた。芭蕉は、女のたいてくれる松葉の火に手をかざして、暖をこつた。

こをたいて手拭あぶるさむさかな

『さあでかけやう。』といひながら、たつて越人をみるに、大分酩酊の様子で、顔をまつ赤にしてゐた。

『大丈夫かの？』

『大丈夫ですとも！』とばかり、越人は、馬にのつた。

『おちるよ、おちるよ。馬まで千鳥足ぢや。』とわらひながら、

雪や砂馬よりおちて 酒の酔

かうよんで、またもわらつた。

ゆきゆいて保美へつき、杜國のかくれ家をたづねあてたのは、もはや夕刻であつた。豫想どほりあれきつた茅屋に、あはれな杜國を発見した時、芭蕉の眼には露がひかつてみえた。

さればこそあれたきまゝの霜の宿

かゝる際、かゝる所へ、かゝる人に、しかも越人と同道ではれるなどは、杜國の夢想だもしなかつたところで、かつおどろき、かつよろこび、ほとんど懐をなしかねたが、それにつぐものは、やはり涙であつた。

その夜は、杜國が心づくしのもてなしに、道中の苦勞を十二分にいやしえて、こゝろよく一睡の夢をむすび、翌朝おきだしてみると、あたりは一面の畠になつてゐて、畠には、麥が青々とのびてゐた。

『この地は、南へのびるとるから、他よりもあたゝかいのぢや。』芭蕉は、心にうなづきながら、

麥はへてよきかくれ家よはたけ村

一つは杜國をなぐさめるつもりで、こんな句をよんだ。

保美から伊良子崎までは、一里もあるこのことであつた。

『伊良子崎は、三河の國の地つゞきで、伊勢とは海一つへだてとる。萬葉集に伊勢の名所のうちへえらんどるのは、なぜかしら？』芭蕉は、そんなことをおもつたりした。その州崎で碁石をひろふ。それを伊良子白といふなどの話もきいた。骨山といふところでは、鷹をうつ。南の海の涯で、鷹は、まづこの地へわたるこのことであつた。

『なるほど古歌にも、「いらこ鷹」の名がみえる。芭蕉は、うちうなづきながら、

夢よりもうつゝの鷹ぞたのもしき

鷹一つみつつけてうれしいらこ崎

これらの句は、杜國を鷹に比して、再會をよろこんだのであつた。

『この地を保美といふのは、昔なにがしの院がおほめなされたからで、ほら、うびといふのさうです。』と、ほこり顔にいふ里人もあつた。

梅つばき早さきほめん保美の里

伊良子崎から船をやとへば、伊勢から伊賀へかへるには、何のわけもないのであつた。けれど、熱田、名古屋の門人にあふかんがへてゐた芭蕉は、杜國には、

『來春は、吉野の花をみるつもりぢや。そなたも同道せられよ。二月を期して、伊勢の山田であふことにしやう。』と約束しておいて、もときた道をひきかへし、ふたゝび鳴海へたちよ、それより熱田へきた。

六五 師走の名古屋

熱田では、例によつて桐葉方を宿とした。この前參詣したときの熱田神宮は、あれにあれて、勿體ないくらゐであつた。今度きてみると、すつかり御修復ができて、御本社をはじめ境内の末社々々も、氣もちよく檜がにほひ、周囲の塀も、眞あたらしくなつてゐた。芭蕉は神前にぬかづいて、

こぎなほす鏡もきよし雪の花

それへ桐葉が、

石しく庭のさゆるあかつき
といふ脇をつけた。

芭蕉歸郷の報に接した美濃大垣の如行は、わざわざ鳴海まででむかへて、ともども熱田へきた。先年の雪見によんだ芭蕉の句に、「市人よこの笠うらう雪の笠。」とあつたのをおもひだし、なほ今度江戸をでる時の「旅人」の句をもひいて、

旅人とわれみはやさん笠の雪
芭蕉は、それをみて、

さかづきさむしうたひ候へ

との脇をつけ、これを巻頭にして、歌仙があつた。

如行と同道、芭蕉は、歩を名古屋へすゝめた。名古屋の門人らは、首をながくしてまつてゐた。美濃の大垣、岐阜の門人らも、おひおひ顔をだしてきた。そして芭蕉を中心に、連句やら俳句やらが、おもしろくよみだされた。芭蕉は、たのしい日また日に、身の他郷にあることをわすれた。

名古屋では、いつもながら雪がふつた。

おもしろし雪にやならん冬の雨

こんなことをおもつてゐると、果然翌朝は、一面の銀世界となつた。

箱根こす人もあるらし今朝の雪

『自分は、つひこの程、箱根をこしてきた。その日は、さいはひに天氣がよかつた。それでも、寒中の箱根ごえは、なかなか樂ぢやなかつたが、この雪に、あの山をこす人は、さぞ難儀なことぢやらう。おもひやられる。』かうおもつたのであつた。

雪の日、ある人の會にゆかうとして、

ためつけて雪見にまかる紙子かな

また一句、

いざゆかん雪見にころぶ處まで

雪のみではなかつた。

旅寝よし宿は師走の夕月夜

雪をみて、月をみて、風人のたのしみつくるころをしらず、半月程を熱田、名古屋の間にあそんで、十二月十日をすぐる頃、同地をさり、伊勢路をへて、伊賀の故郷へむかつた。途中の家々では、もはや煤掃をやつてゐた。

『今に正月がくる。』かうおもふにつけて、眼前無常流轉の理をみせつけられるやうな気がして、芭蕉は、感慨無量であつた。

旅寝してみしや浮世の煤はらひ

熱田からは、佐屋まはりの船にのつた。有明の月もいりはて、うちみやる美濃路、近江路の山々には、雪がふりかゝつて、あはれさいふばかりもない折柄、乗合中に、武家の仲間もみえる男、おそろしく髯のはえたのが、やゝもすれば、船頭をつかまへて、ねめつけ、おこりつけるのには、あたらしい心地がせられた。

とかくして、船は、桑名へついた。「桑名よりくはできぬれば」といふ日永の里からは、馬にのつた。かくて杖突坂をのほりかゝつた時、馬になれない芭蕉は、鞍と一緒に、どつと馬からすべりおちた。ひこり旅で、たよりなくおもつてゐるさへあるに、馬子からは、

『へたな乗手ぢやないか。』などしかられて、芭蕉は、大しよけにしよけながら、

かちならば杖突坂を落馬かな

突嗟の句とて、季の言葉がないのも、をかしかつた。

六六 故郷にありて

芭蕉が、四年ぶりで伊賀へかへり、またまた故郷の人になつたのは、年のいよいよおしつまつた頃であつた。

代々のかしこき人々も、故郷はわすれがたきものにおほえはべるよし。われ今、はじめの老の四とせすぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齡かたぶきてはべるも、みすてがたくて、初冬の空のうちしぐるゝ頃より、雪をかさね、霜をへて、師走の末伊陽の山中にいたる。なほ父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしもかなしく、おもふことのみ數多ありて、

古里やへそのをになく年の暮

芭蕉のために、故郷はつねに涙の地であつた。

大晦日の夜は、兄と二人で、年わすれの酒に夜をふかし、おもはず元日の朝をねすごし、眼をさました頃には、貞享五年すなはち元祿元年の初日影が、芭蕉のねてゐる枕頭まで、あかあかとさしこんでゐた。

『初空をがむつもりぢやつたに、これははや、とんだ失敗をした。』とつぶやきながら、褥をおきだして、

二日にもぬかりはせじな花の春

初春の句に、

春たつてまだ九日の野山かな

ましてこゝは伊賀の山中、みわたすかぎり冬がれのけはしい景色であつたが、さうした中にも、

枯芝ややゝ陽炎の一二寸

など、どことはなしに、

『さすがに春ぢやな。』とうなづかれるやはらかさがあつた。

同國阿波の莊の新大佛寺といふは、南都東大寺の聖俊乗上人の舊蹟として、つとに芭蕉の耳へもはいつてゐた。芭蕉は、今度故郷に年をこしたをさいはひ、舊友の宗七、宗無などをさそひあはせて、一日、かの地にあそんだ。

『今ぢやすつかりあれてしまつて、まるで野原ですよ。何もみるものはありませんよ。』といふものもあつたが、芭蕉は、その野原、そのあれた跡がみたいのであつた。

いつてみると、なるほどあれにあられてゐた。仁王門や鐘樓の跡は、枯草の底にかくれ、一松物いはゞことゝはん、礎ばかり莖のみして。」といつたのも、かうしたながめとおもはれた。蓮華台、獅座の座なども、たゞ苔の跡のみをのこしてゐた。大佛の御像は、うしろの岩窟のうちへたゞみこまれたまゝ、霜にくち、苔にうもれて、わづかにそれと知られた。それでもお首だけはつゝがもなく、上人の御影をあがめおく草堂のかたはらに、さびしく安坐せられてあつた。

『昔この寺ができるについては、おびたゞしい人力がつひやされたこゝろやらう。この廣々

とした遺跡をみても、おもひやられる。しかるにその人力も、上人の貴願も、みんな徒事になつてしまつた。』とおもへば、かなしさいはん方なく、涙に言葉もなくて、むなしき石臺の前にぬかつきながら、

丈六にかけらふたかし石の上

こ詠じ、かへる途すがらも、

『丈六の大佛ばかりぢやない。無常流轉の世にあるものは、何物、何事も、いづれは陽炎になつてしまふのぢや。いや、その物、その事として現存するまゝが陽炎ぢや。すべてが夢ぢや、幻ぢや。』諸法従本來、常示寂滅相。』の佛箴、なるほど相違はない。』そんなことをおもひつゞけた。

六七 藤堂家のまねき

二月早々には、伊勢の山田へきて、内外兩宮にまうでた。芭蕉が兩宮にまうでることは、これまですでに數度におよんだ。一つ一つ年のくはゝるにつれて、ありがたさもくはゝるや

うにおもはれたが、今御寶前にぬかづくくと、むかし西行法師が、

何事のおはしますかはしらねどもありがたさにぞ涙こほるゝ

と詠じたこと、増賀の聖が、

『名聞利養の欲をすてよ。』この神勅をかうむり、小袖、衣類をぬぎすてゝ退下したことなどがしのばれて、袂をしほるばかりであつた。よつて、

何の木の花さはしらす句かな

これは、西行の歌に和しての詠であつた。

はだかにはまた如月のあらしかな

これは、増賀の衣類をぬいだことにおもひあはせての詠であつた。

参拜をはつて、あまねく境内を拜觀するうち、

神垣やおもひもかけず涅槃像

かういつておどろくやうなこともあつたが、それ以上の不思議は、時は二月、梅の花ざかりさいふのに、こゝには一本の梅の木もないことであつた。芭蕉は、合點がゆきかねて、神

司にそのわけをとうてみた。神司は、

『たゞ何といふことなしに、梅の木は一本もありません。』とこたへ、急におもひだしたやうに、

『いや、御子良子のうしろに、たゞ一本だけあります。』といつた。

御子良子の一もきゆかし梅の花

伊賀の上野は、芭蕉の故郷だけに、土芳、卓袋、苔蘇、風麥、その女梢風、宗七、宗無、同族桃隣など、門下にはいるものがおほかつたが、伊勢の山田にも、前にあけた風瀑をはじめ、益光、又玄などの諸門人があり、芭蕉今度の参宮を機会に、俳筵をもよほした。これも山田の人網代民部といふは、神職をつとめて、しかも俳諧をこのみ、一日、父子して、芭蕉をその雪堂にまねき、種々響應するところがあつた。芭蕉は、

梅の木にまたやどり木や梅の花

きよんで、民部におくつた。

芭蕉が山田へきたのは、一つは杜國をむかへるためでもあつた。その杜國は、このころ伊

良古崎から海をわたつて山田へきて、諸所の句筵にも出席した。芭蕉は、半月あまりを山田にすごし、さてのち杜國同道上野へかへり、爾後の一ヶ月を宗無の家に起臥した。

三月にはいつて、芭蕉は、上野城代藤堂氏のまねきをうけた。藤堂家の當主新七郎良長は芭蕉のつかへた蟬吟公の遺子で、これまた俳諧をこのみ、號を探丸といはれた。

『邸内の櫻が、ちやうど見頃ぢや。あそびにこられよ。俳諧の話がききたい。』とのこゝであつた。

芭蕉は、懐舊の情をあらたにしながら、早速出頭した。當時はまだほんの子供で、西東もわからないでゐられた公は、もはや突として弁する偉丈夫で、なつかしげに芭蕉をむかへられた。芭蕉のおもひはまた一入で、はやくも双眼を涙にくもらせ、御前にひれふしたきり、何といふべき言葉もなかつた。

庭前の櫻は、今をさかりにさきみだれてゐた。その櫻は、芭蕉が、そのむかし蟬吟公と二人でみた櫻であつた。その櫻を題に、句をたゞかはしたこともあつた。公が世をすてられ、芭蕉が他へさつてのちも、櫻ばかりは、春毎に苔をもち、主なき庭にさきさいて、二十餘年

をへた今日も、昔ながらにさいてゐるのであつた。芭蕉は、彷彿として故公の温顔に接する感があつた。感慨のあまり、

さまざまの事おもひだす櫻かな

六八 吉野再遊

吉野の櫻は、他よりもおそく、いつの年でも、三月二十日前後が見頃といふことになつてゐた。上野あたりの櫻が、やうやく若葉にならうとするころ、三月十九日といふに、芭蕉は杜國と二人で、吉野への旅にでることにした。

時に杜國は、

『ともども旅寝のつらい目にもあひ、かつ童子になつて、道中の御用をいたしませう。』とのことで、みづから世をしのぶ假の名をまうけて、萬菊丸といつてゐた。芭蕉は、その志をよろこび、

『それにしても、萬菊丸とは、童らしい名ぢや。おもしろい。』と興がり、

『では、首途のたはむれことをしやう。』と、道中がかぶる笠ののちへ、

乾坤無住同行二人

吉野にて櫻みせうぞ 檜木笠

と落書した。

『ぢや、私も……』といつて、杜國もおなじくかきつけた。

吉野にてわれもみせうぞ 檜木笠

宿の宗無方では、前に、

花を宿にはじめをはりや二十日程

こんな句があつたが、今發するにのぞんで、

この程を花に禮いふわかれかな

の句をのこした。

旅に持物のおほいのは、道中のさほりになるからと、身輕を專一に、大部分はらひすてたけれど、夜の料の紙衣一つ、合羽様のもの、それに硯、紙、藥、晝辨當などは、是非もつて

ゆかなければならなかつた。よつて芭蕉は、それらの品々を物につゝみ、脊中におうてでかけた。それは、何程の荷物でもなかつたが、たゞさへ足のよわい、非力の芭蕉は、あるきながら、後へ後へさひかれるやうで、道のはかどらないこまはおびたゞしかつた。たゞたゞものうきおもひをしながら、

くたびれて宿かる頃や藤の花

初瀬寺へまうでたときには、し、し、しと雨がふつてゐた。

春の夜やこもり人ゆかし堂の隅

足駄はく僧もみえけり花の雨

萬 菊

葛城山をあふいで、

なほみたし花にあけゆく神の顔

多武の峯から龍門へこえる途中、躰峠に足を休めて、

雲雀より上にやすらふ峠かな

龍門の瀧をみて、

龍門の花や上戸のつとにせん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

歩をすゝめて、吉野川のほとり西河へでると、そのあたりには、いはゆる「峯の山吹」が、一重にさきこほれて、そのあはれさは、櫻にもおとるまじくおもはれた。

ほろほろと山吹ちるか瀧の音

西河から吉野川にそうて、さらにさかのほるこ、蜻蛉ヶ瀧といふがあつた。そこは吉野川の上流で、しかも山の中でもあり、かなり道のわるい處であつた。それにしても、足弱の身が、この日頃、毎日五六里づつもあるいて、今日はまた、こんな峻嶒をかしてきたこまをおもふこ、芭蕉は、われながらおどろかされた。

『これといふのが、自分は、花にみいられとるのぢや。これも「風雅の魔心」のわざぢや。』心になづきながら

さくらがり奇特や日々に五里六里

その邊には、檜にいたあすならうこいふ木がおほかつた。この木は、

『あすは檜にならう、あすは檜にならう。』といひいひ、一生涯ならずじまひにしまふとか。『現在をつとめずに、たゞたゞ未來を空想し、明日は明日はで一生ををばる。人間にも、このあすならうがあるらしい。』とおもふと、芭蕉は、をかしかつた。と同時に、はなやかな櫻の中のさびしいあすならうの姿が、たゞちにはなやかな世の中のさびしい自分の姿でもあるやうにおもはれて、一種の哀愁なきをえなかつた。

日は花にくれてさびしやあすならう

吉野の花には、三日とままつた。曙の花は、夢のやうにあはかつた。黄昏のながめは、満山これ雲かとみまがはれた。花の木の間有明の月は、いふばかりなくあはれであつた。

この好風景に對した時、芭蕉の全心全身は、たゞそのうちへ吸収せられていつた。みられる花とみる人との、兩々相融合して、渾然たる一體のものとなり、その間の差別がなくなつた。花は、芭蕉となり、芭蕉は、花となり、兩者をあはせて打成一片となつた。芭蕉は、茫然として自失した。いはゆる忘我の域にはいつた。

勿論いふべき言葉をしらなかつた。貞門の貞室は、

これはこれとはばかり花の吉野山

と嘆じたが、なほそれだけの言葉があつた。言葉があつたのは、花をみたからであつた。花と人との間に、若干の距離があり、「人」が「花」を賞したからであつた。けれど芭蕉は、花と一片になつた。自然何といふべき言葉もなかつた。

これ畢竟、花に興じ、月をたのしむ心が、人並以上に痛切なるがための、餘儀もない成行であつた。

洛の貞室が、これはこれはとうちなぐりたるに、われは、いはん言葉もなく、いたづらに口をとぢたる、いと口をし。おもひたちたる風流、いかめしくはべれども、こゝにいたりて、無興のことなり。

その實、「無興」ではなくて、かへつて有興にすぎたのであつた。

かくて芭蕉は、たゞへば啞者の花見のごとく、黙々として山をくだり、その夜は、飯貝に一宿した。

飯貝や雨にこまりて田螺きく

六九 大阪にいたる

284

南方たかく高野山をみた時、芭蕉は、二十餘年のむかし、故主蟬吟公の遺髪を奉じて、あの山にのほり、報恩院にをさめたことをおもひだした。悲嘆のあまり、しきりに隠心をもよほして、結局主家を亡命するにいたつたこゝ、現に俳諧の一道につながつて、世をわび人の數にはいつてゐるのも、由來をたゞせば、實にこの時に胚胎することなどが、感慨ぶかく追想せられて、足は、おのづから高野道にむかつた。

高野山、この幽邃なる塵外の靈山にわけのほつたとき、芭蕉は、山氣のひしひしと身にせまるをおほえた。嚴肅なる大自然の光景に、またもみづからうしなはんとして、ふと耳についたのは、樹林の蒼鬱たるが中になく雉子の聲であつた。

父母のしきりにこひし雉子の聲

「焼野の雉子」のたゞへもある。むかし行基菩薩は、「ほろほろさなく山鳥の聲」をきいて、「父かとおもふ母かとおもふ」と詠嘆した。今芭蕉は、山鳥ならぬ雉子の聲をきいて、

なき父、なき母をしのんだのであつた。

同行の杜國も、その身現に幽囚のうちにあることをかへりみなどして、しきりに世外の情をもよほしながら、

ちる花にたぶさはづかし奥の院
と、いつはらない衷情をはいた。

吉野川は、紀州へはいつて、紀の川となる。吉野川にそつて高野山へきた二人は、高野山をくだると、さらに吉野川にそつて、西へ西へを和歌の浦へでた。

ゆく春に和歌の浦にておひついたり

紀三井寺にも参詣した。西國三十三所中、一番の札所なるこの靈地へは、笈をかけた巡禮道者が、あとからあとからさ足をこんできた。

『みんな旅をする人ぢや。自分たちとおなじやうに。』かうおもふと、雨にたゞかれ、風にもまれたその姿が、いたましくもあり、なつかしくもあつた。

芭蕉には、しみじみと「旅」といふことがかんがへられた。旅中の心もちは、伊賀の故郷に

285

あつたり、江戸の芭蕉庵にゐたりする時のそれとは、また格別であつた。

跪はやぶれて、西行にひそしく天龍のわたしをおもひ、馬をかる時は、いきまきし聖のこと心にうかぶ。山野、海濱の美景に造化の工をみ、あるは無依の道者の跡をしたひ、風流の人の實をうかゞふ。なほ栖をさりて、器物のねがひなし。空手なれば、途中のうれひもなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よりもあまし。とまるべき道にかぎりなく、たつべき朝に時なし。たゞ一日のねがひ二つのみ。今宵よき宿とらん、草鞋のわが足によるしきをもとめんとばかりは、いさゝかのおもひなり。時々、氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人にてあひたるよろこび、かぎりなし。日頃は古めかしく、かたくななりとにくみすてたる人も、邊土の道づれにかたりあひ、埴生葎のうちにみいだしたるなど、瓦石のうちに玉をひろひ、泥中に黄金をえたる心ちして、物にもかきつけ、人にもかたらんとおもふぞ、またこれ旅行のひとつなりかし。

年の割にゐてゐる芭蕉は、くたびれて宿へはいつでも、容易にねつかれない晩がおほかつた。枕をならべてゐる杜國は、わかいだけに、最初のうちこそ、その日にみた名所舊

跡の話をしたり、句を案じて斧正をこうたりしてゐるが、いつの間にか夢路にはいり、やがて躰をかきだすといふ風であつた。その躰が耳につくと、芭蕉は、ますますねむられなかつた。杜國の躰は、なみはづれておほきかつた。芭蕉は、ねながら筆をとつて、その躰のふとくなり、ほそくなり、たかくなり、ひくゝなるのを、紙上へ線でかきこつて、翌朝杜國にみせて興がりなどした。こんなことも、たゞ旅中でのみのたはむれであつた。

一つぬいでうしろにおひぬ衣がへ 芭蕉

吉野でて布子うりたし 更衣 萬菊

ゆく春を旅中におくつて、くる夏を旅中にむかへ、そして旅中に衣をかへる。「旅」といふことが、もつとも痛切に感じられた。

奈良へきたのは四月八日、あだかも灌佛の日であつた。こゝかしこと見物してあるくうちに、鹿が子をうむのをみて、

灌佛の日に生まれあふ鹿の子かな

『この日に生まれる鹿は、さだめて佛縁があるのぢやらう。』かういつてわらつた。

奈良のちかくにある唐招提寺へまうでた。この寺の開山鑑真和尚は、來朝の際、船中で七十餘度の難をしのがれ、お眼へ潮風がふきいつて、ために失明せられたとのことで、瞽のお像がおかれてあつた。芭蕉は、そのお像を拜しながら、

若葉しておん目の雫ぬぐはゞや

この頃、途中で道づれになつた舊友があつたが、それとは奈良でわかれた。

鹿の角まづ一節のわかれかな

大阪では、しばらくある方に滞在した。

杜若かたるも旅の一つかな

七〇 夏の須磨と明石

大阪に滞在中、一日、須磨にあそんで、月をみた。須磨は、月の名所ながら、月はやはり秋のもので、夏の月は、はなはだ興あさくおもはれた。

月はあれどるすのやうなり須磨の夏

月みても物たらはずや須磨の夏

それでも一夜の宿をもこめて、翌朝未明におきだしてみると、をりから四月なかばの空は朧にのこつて、はかない短夜の月が、艶にりつゝ西へかたむき、またすてがたい風情があつた。山々は、若葉にくろみかゝり、時鳥のないてとびさうな東の空は、海の方からしろみそめた。夜のあけるにつれて、海岸から山手へかけ、順にたかくなつていつてゐるあたりに麥の穂波があからみあつて、そここの漁家の軒ちかく、芥子の花が、たえだえにみわたされた。

海士の顔まづみらるゝや芥子の花

芭蕉は、案内の小童をやとひ、杜國と二人で、敦盛の墓をはじめ、あたりに數ある名所、古跡をみてまはつた、東須磨、西須磨、濱須磨を通じて、あながちに何業をするともみえなかつた。古歌に、「藻鹽たれつゝ」などきこえてゐるけれど、今はさうでもないらしかつた。きすこといふ魚を、網でとつて、真砂の上へほしちらしておく、鴉がきては、つかんでゆく。それをにくんで、案山子の月でおどすなども、海士のわざには不似合にみえた。

『古戦場のことで、昔のたゞかひの名残でせうよ。』

『さうおもふと、なほさら罪がふかい。』二人は、こんなことをはなしあつた。が、昔のこひしいまゝに、

『鐵拐ヶ峰へのほらうよ。』こいひだした。かの小童は、非常にくるしがつて、

『いや、それは大變だ。よした方がいゝでせう。だつて、その嶮岨なところといつたら、とてものほれるもんぢやありません。怪我をしますよ。』など、いひまぎらさうとするのを、

『そんなことをいふな。麓の茶屋で、餅でも、餠でも、お前のすきなものをたべさせるからな。』この言葉に、

『ぢや、のほりませう。』こ、しぶしぶ承知して、先にたつた。

小童、年十六とのことであつたが、うちみたところ、十一二ぐらゐのがらしかなかつた。

それが、數百尺の先達として、崎嶇羊腸たる岩根をはひのほる。幾度もすべりおちやうとしては、躑躅、根笹などにとりつき、息をきらし、汗をながして、やうやく雲門へはいるこゝができたのは、まことに心もとない導師の力ではあつた。

須磨の海士の矢先になくや時鳥

ほこゝぎすきえゆく方や島一つ

その島は淡路島で、山上からは、つひ脚下にみえ、須磨、明石の海が、その左右にわかれてゐた。

蝸牛つのふりわけよ須磨明石

芭蕉は、繪をみるやうな好風景に魂をうばはれながら、

『話にきく吳楚東南のながめといふのも、こんな所ぢやらう。物をしつた人がみたら、さまざまの地におもひなぞらへるぢやらうが、自分にはそれができぬ。』かうおもつて、若干みづからあはれんだ。

山一つへだたて田井の畑といふのは、村雨、松風の古里とのことであつた。峰つゞきに丹波路への道があつた。鉢伏のぞき、逆落など、名をきいても、ぞつとせられた。

鏡掛松からみおろすと、一の谷内裏屋敷の跡が、一目下にみえた。それをみると、壽永の昔、平家のやぶれた當時のさまが、まざまざとおもひうかべられた。二位の局は、幼帝をい

だきたてまつり、いそぎ船にのらうとして、女院の御裳に足をとられ、そのまゝ船の中へたふれられる。内侍、局、女孀、曹子などは、種々の調度をもてあまし、琴や琵琶などを、茵蒲團にくるんで、船中へなけいれる。櫛笥や鏡臺などは、渚に散亂して、のちは海女のひろひ草となり、供御の料は、海中にこぼれて、魚の餌となる。さうした光景が、まのあたりみえるやうで、千歳のかなしみは、この浦にとどまり、うちよする波の音さへ、うれひをつけるかとおもはれた。

須磨寺では、敦盛の青葉の笛をしのびつゝ、

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

一夜は、明石でとまつた。をりから漁夫が壺で蛸をとるのをみて、

蛸壺やはかなき夢を夏の月

『わが尊とのみおもつてゐる蛸の夢は、はかなくやぶれて、たちまち人にとられてしまふ。自分ら人間の運命が、ちやうどそれではあるまいか。』そんなことをおもひながら、一旦大阪へかへつた。

三月十九日伊賀上野を出で三十四日。道程百三十里。このうち舟十三里、駕籠四十里、歩行路七十里。雨にあふこと十四日。

瀧の數七つ。龍門、西河、蜻蛉、蟬、布留、布引、箕面。

古塚十三。兼好塚、歌塚、乙女塚、清盛石塔、忠度塚、敦盛塚、人麿塚、通盛塚、松風村雨塚、越中前司盛俊塚、河原太郎兄弟塚、良將楠塚、能因法師塚。

峠六つ。琴引、躰峠、くらがり峠、當麻岩屋、小佛峠、櫻尾峠。

坂七つ。粧坂、西河上ちいか坂、うはか坂、宇野坂、かぶろ坂、不動坂、生田小野坂。

山峰六つ。國見山、安禪嶽、高野山、てつかいヶ峰。勝尾寺山、金龍寺山。
この外、橋の數、川の數、名もしらぬ山々は、かきもらし候。

卯月二十五日

萬 菊

芭 蕉

惣 七 様

惣七といふのは、保美の人で、社國の留守をあづかつてゐたのであつた。旅中見聞すると

ころを總勘定して、かうかきあげた時、二人は、今度の旅が、かなりの大旅であつたこと、
そしてうるところの少々でなかつたことをおもひ、胸に愉快の情のあふれるのをおほえた。

芭蕉は、この旅を日記にまこめて、「笈の小文」と題した。

七一 長良川のほとり

大阪から京都へ轉じて、幾日かを逗留中、五月四日といふに、一俗士にさそはれて、吉岡
求馬の芝居をみた。しかるにその翌日になると、求馬死去の報がつたへられた。芭蕉は、つ
いづくとも無常迅速の理を感じながら、

花あやめ一夜にかれしもとめかな

大津、堅田、膳所のあたりには、大勢の門人がまちうけてゐた。芭蕉は、一夜、それらの
人に案内せられて、石山から瀬田へ、螢をみにいつた。その邊は、螢の名所としてしられ、
琵琶湖の水が、瀬田の長橋をくゞつて、瀬田川となるあたり、無数の螢が闇をぬうてとぶ景
色は、いふばかりなくうつくしかった。

この 螢田 毎の 月に くらべ みる

この秋は、木曾路をへて甲州にいり、姥捨山の月をみやうと、そんなかんがへてゐたので
あつた。

おひおひ梅雨季となつてきた。折柄の五月雨に、

さみだれにかくれぬものや瀬田の橋

近江から美濃へくると、例によつて、大垣の木因亭にはいつた。

ふらずとも竹うへる日よ蓑と笠

時に同國關の人惟然坊がきて、をしへをこうた。この人、もと富裕であつたのが、世事に
無頓着で、營利に心がなく、ひたすら風雅をよろこんだところから、いつとはなしに産をう
しなひ、興のおもむくがまゝに、諸所を風狂してあるくといふかはりものであつた。芭蕉は
その爲人をあはれみ、いふがまゝに門下にくはへた。

ついで岐阜の門人秋芳、巳白などの懇請に應じて、同地へいつた。稲葉山の松の下、長良
川の水の涯は、もつて長途の疲勞をなぐさめるにたつた。

山陰や身をやしなはん瓜畑

一夜長良川にあそんで、鶺鴒をみた。鶺鴒をつかつて鮎をとるこのわざは、もつばら間の夜をえらんでおこなはれた。黑暗々たる中を、篝火をたいた數隻の舟が、川上からくだつてくる。聞ば變じて晝となる。幾十羽の鶺鴒は、ほうほうといふ漁夫の掛聲にはけまされて、水中へもぐつては、さかんに鮎をとつてくる。その見事さはないが、長良川の水勢は、箭よりも急で、鶺鴒はたちまち、川下へくだつてしまふ。あとはふたゝび間となり、物さびしい光景にかへる。芭蕉は、歡樂ののちの哀情におそはれながら、

おもしろうてやがてかなしき鶺鴒かな

鮎の風味は、芭蕉の口になつた。

またたぐひながらの川の鮎脰

金華山の頂には、齋藤氏の城跡があつた。

城あとや古井の清水まづとはん

しづかな稻葉山の木蔭々々には、蟬がしきりにないて、鐘の音ともきゝなされた。

つく鐘もひびくやうなり蟬の聲

一日、賀島氏の別荘にまねかれて、「十八樓の記」をつくつた。

美濃の國長良川にのぞみて水樓あり。主を賀島氏といふ。稻葉山うしろにかたく、亂山左右にかさなりて、ちかからず、とほからず。田中の寺は、杉の一むらにかくれ、岸にそふ民家は、竹のかこみのみどりふかし。瀑布所々にひきはへて、右に渡し船うかぶ。里のゆきかひしゆく、漁村軒をならべて、網をひき、釣をたるゝおのがさまさまも、たゞこの樓をもてなすにいたり。くれがたき夏の日もわするゝばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすほるゝ篝火の影もやゝちかく、高欄の下に鶺鴒するなど、目ざましきみものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちにおもひためたり。もしこの樓に名をいはんとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

このあたり目にみゆるもの皆すゞし

こゝに不幸は、落梧がその愛兒をうしなつたことであつた。

もろき人にたとへん花も夏野かな

おなじ頃、去來の妹千子の計がきこえた。

なき人の小袖も今や土用干
かうよんで、去來の許へおくれた。

夏中を岐阜にすごして、七月のはじめ、涼風のたちそめるころ、尾張へきて、名古屋、熱田、鳴海の間に、一ヶ月あまりを優遊した。鳴海での俳筵には、

初秋や海も青田もひとみどり

の句があり、これを發句として、

のりゆく馬の口とむる月 重辰

藁びさし霧ほのぐらし茶をくみて 知足

やせたる籾の竹まばらなり 如風

蛤のからふみわくる高砂子 安信

笠ふりあけて船まねく聲 自笑

と、門人らが順次につけた。

名古屋でも、俳筵がまうけられ、

粟稗のともしくあらず草の庵

芭蕉のこの句に、

籾の中よりみゆる青柳

と、長虹が脇をつけ、門人数名が、下をよみつゞけて、一卷の歌仙ができた。

七二 木曾の秋

とかくする程に、七月の末となつては、秋の色もやうなく深く、更科の里、姥捨の月が、しきりにおもひやられた。吉野から須磨、明石へと同道した杜國は、江州路でわかれ、たゞ一人伊勢路へまはり、海上を伊良古崎へわたつて、保美の配所へかへつた。名古屋の門人らは、虚弱な芭蕉が、信州の奥へ一人旅することを、非常に懸念がつた。

『木曾路は、道が險阻ですから……』などいふのをきくと、芭蕉自身も、若干の不安なきをえなかつた。

『では、私がお供しませう。』と越人がいひだした。荷兮は、それでも不安におもつて、倔强な僕をつけることにした。

『これなら、地獄の旅も大丈夫じゃ。』と、芭蕉は、非常に心づよくおもつた。

人々は、一行三人のために、あれこれと心をつくし、世話をするのであつたが、いづれも旅には不なれなものばかりで、萬事が後や先になり、たゞまごまごこと、かなり滑稽なことがおほかつた。

名月までの日數をはかつて、八月十一日、名古屋を發足した。荷兮ら諸門人は、一行を廓外にみおくり、別盃をかたむけた。

朝顔は酒盛しらぬさかりかな

無心にさく朝顔にも、芭蕉は、若干の別意を感じた。

おくられつおくりつはては木曾の秋

この一句をのこして、芭蕉は、たゞ三人ぎりになつた。

尾張から美濃の東南部を一過し、木曾川にそつて木曾路へはいると、四邊の光景が、おひ

おひかはつてきた。山は、おひおひふかくなり、川はおひおひすこくなり、道は、おひおひわるくなつて、名古屋できいた言葉が、なるほどとなづかれた。

時に年六十ばかりの道心僧があつて、脊には腰のたわむまで物をおひ、さもおもさうに、息をはづませながら、きざみ足にやつてきた。おもしろけも、をかしけもなく、たゞむつむつとしたその顔つきをみると、ふきだしたくもある一方には、あはれにおもはれたので、

『もしもし、お老人！』つひに越人が聲をかけた。

『大層なお荷物ですね。さぞおもいでせう。どこまでおいでなさる？』

『わしは、まだまだ遠方でござる。』

『さやうか。私たちも、遠方へゆくものだ。すけてあげませう。さいはひ馬をやとつたころだから、一緒につけていつてあげます。荷物をおだしなさい。』

『それはありがたう。おほきにたすかります。では、おねがひまをします。やれやれ、ありがたや、ありがたや。』太息しながら、脊から荷物をとりおろした。越人らは、自分たちの荷物とそれを一まとめにして、馬へくくりつゝ、芭蕉をその上へうちのせてでかけた。

七三 山中の一夜

309

道は、一歩々々けはしくなつていつた。みあけると、高い山、不思議な形をした峰が、人をおしつけでもするやうに、頭の上からおつかぶさつてゐた。みおろすと、一見千尋のおもひがされる崖下を、木曾川の水が、岩をかみ、岸をつきつゝ、いきほひ猛にながれてゐた。それらの山と川との間に、わづかに一條の道があるばかりで、一尺の餘地もなければ、一歩ふみあやまつたが最期、馬もろとも、たちまち谷底へおちなければならぬのであつた。

馬上の芭蕉は、心はなほだおだやかでなかつた。悪路のことで、やゝもすると、馬が物につまづく。その都度、胸をひやさなければならなかつた。

かくて雲路をたどる心地をしながら、棧をわたり、寢覺の床をすぎ、猿が馬場、たち峠など、俗に四十八まがりといひつたへるやうな難處をとほつたが、もはやたまらなくなると、『しばらくあるくから……』と、到頭馬をおり、かの僕とかはつた。

さてあるきながらも、眼はくるめき、魂はしほんで、足もとがさだまらぬのに、僕は、一

向平氣なもので、馬上ながらたゞねむりにねむり、おちさうになることも一再でなかつた。

芭蕉は、あやふけにそれをみながら、

『しかし佛の御心から、衆生の浮世をみられるのも、やはりこのとほりぢやらう。露の命をもちながら、あやふいともおもはず、いつまでもしなぬやうな顔をして、うかうかと日をおくつてをる。自分たちの日常が、あの僕とすこしもかはらぬ。』と、無常迅速のことわりが、わが身の上にかへりみれら、

『これをおもへば、阿波の鳴戸に浪風はない。』などおもひつゞけながら、夕刻、さある宿屋へはいつた。

夕飯をはつて、芭蕉は、すゝけた行燈を前に、矢立、懐紙をもつてすわつた。途中でよんだ句を推敲したり、ましまりかけたものをまとめたりするためであつた。それは、なかなかのほねであつた。じつと目をつぶつて、頭をたゞいたり、疊につゞぶしたりして、しきりに呻吟してゐるさ、かの道づれの道心坊は、旅の心うさに、故郷のことを案じわづらつてゐるのであらうぐらゐに察して、自分がわかい頃をがみまはつた諸國の寺々、阿彌陀如來のあ

303

りがたさ、さては自分が不思議におもつたことなどを、しきりにはなしつゞけ、芭蕉をなくさめやうとするのであつた。それが風情のさはりになつて、芭蕉のかんがへは、ますます散亂していつた。といつて、すけなく話をやめさせることもならず、芭蕉は、ほとほとあましてしまつた。

もてあました末に、

『とてものことに……』と筆をすてるご、さきすましたやうな月影が、壁のやぶれ目から、木の間がくれにさしこんでゐるさへあるに、からからなる引板の音、ほうほうとよぶ鹿おふ聲が、あちこちにきこえて、物がなしい秋の心も、こゝにつくしてゐるかとおもはれた。亭主をよんで、

『月の主に酒をふるまはう。』といへば、亭主は、いそいそとひきさがり、やがて酒肴をもちだした。杯は、普通よりも一まはりおほきく、ふつゝかな蒔繪がしてあつた。芭蕉は、その杯をあけながら、

『都人士は、こんな杯など、風情がないといつて、手にもとるまいが、こゝでかうして酒を

のむには、玉の盞の心地がされる。これも所柄ぢや。』かういつて、すくなからず興があつた。さうした中からも、

棧やいのちをからむ蔦かつら

棧やまづおもひいづ駒むかひ

あの中に蒔繪かきたし宿の月

これらの句がまとまり、越人にも、

霧はれて棧は目もふさがれず

といふ一句があつた。

七四 田毎の月

鹽尻から道を右へはいれば甲州路、左へとれば善光寺へゆく。芭蕉らは、左へとつた。途中松本をよぎり、犀川にそつてゆくことしばらく、右へそつて千曲川のほとりへでると、そこは八幡といふところ。姥捨山は、その南方一里ばかりにあつた。山は、さまでたかくもな

く、かどかしい岩などもみえず、たゞあはれふかい山の姿であつた。

秋ばれの空はつゞいて、その夜の月は、ことによかつた。山上からは、麓にならぶ田から村から、千曲川にそつてひらけた一帯の平野、歴史に名高い川中島のあたりまでが、一目にみわたされた。四方にたちならぶ諸高山も、晝間のけはしさををさめて、月光の中にあはあはしかつた。芭蕉らは、たゞたゞ感嘆した。

自然の好風景に接するごとに、さかく涙ぐましい心もちになる芭蕉は、今姥捨山の月をみるにおよんで、ことに切なる哀愁をおほえた。まづもつて「姥捨」の名がかなしかつた。

『無事であるてさへあはれな老婆を、こんな山の中へすてるとは、何といふいたましいことぢやらう。』とおもふと、月の光も涙にくもつた。

おもかけや姥ひさりなく月の友

月の興のつきないところから、翌夜も同地にまゝまつた。

いざよひもまた更科の郡かな

ついで長野の善光寺にまうでた。途すがら右の方をみると、淺間山がそよりたち、山のい

たゞきからたちのほる烟が、風のためにかきまぜられて、ものすごい光景を呈してゐた。噴火山をふきまく風は、そのはけしさも、他の地で経験するのとは一段であつた。防風のためであらう、その邊の民家の屋根には、石がごろごろとおかれてあつたが、その石をさへ、一ふきにふきとばしさうであつた。

ふきとばす石は淺間の野分かな

善光寺では、

月影や四門四宗もたゞ一つ

長野からは、千曲川ぞひの上田、小諸の町々を一過し、輕井驛をへて、碓井峠にかゝり、折柄の秋色を賞しつゝ、上州へでた。その途中でも、

ひよろひよろとなほ露けしや女郎花

身にしみて大根からし秋の風

木曾のたび浮世の人のみやけかな

などの句があつた。

かくて八月の末、やうやく深川の草庵へかへりついた。去冬、「旅人とわが名よばれん」の一句をとどめて出發して以來、こゝにいたつて満十個月、日數においても、里程においても前の野ざらしの旅以上の大旅行であつた。

其角、嵐雪、杉風、素堂らをはじめ、江戸の門人一同は、心の底からよろこびむかへた。中にも素堂は、

むかし行脚のころ、いつか花に茶の羽折みんと吟じて、まちうけはべりしその羽折、身にしたがひて、五十三驛ふたゝび往來す。さらぬ野山をもわけつくして、風にたゝへ、日にさらせしまゝに、離婁の明も色をわかつによしなく、龍田の姫もそめかへすもこかたかるべし。これなほ古里の錦にもなりぬるかと、をかしくもあはれにはべる。たれかいふ、素堂素ならず、目くろし。茶の羽折とはよくぞ名づけける。その詞にすがりてまたまをす。

茶の羽折おもへば主に秋もなし

いはゆる「茶の羽折」は、數年前素堂のおくつた品で、芭蕉は、野ざらしの旅にも、今度の

旅にも、それをきて、諸所を吟行した。今草庵へかへつたところをみると、やはりそれをきてゐるのであつたが、随分よくきふるしたもので、茶とも、鼠とも、わからないやうになつてゐた。素堂は、それがをかしさに、かうした戯文をつくつたのであつたが、まことは、これもよろこびのあまりであつた。

草庵へも同道した越人は、荷兮の托した消息を、宛名の其角にわたした。其角は、

落着に荷兮の文や大津雁

と即吟した。越人は、

三夜さの月見雲なかりけり

との脇をつけた。

嵐雪、苔翠の二人は、越人を各その自宅へまねいて、歌仙をもよほしたり、俳筵をひらいたりした。杉風その他も、越人のために句會をひらき、歡待これつこめた。

ある日、草庵の上を雁がわたつた。

かりがねもしづかにきけばかまびすや

越人のよんだこの句に、芭蕉は、

酒しひならふこのごろの月

九月十日には、素堂の庵に菊見の句會があり、芭蕉、越人、さもに招待をうけた。十三日には、芭蕉庵に月見の句會があり、門人のおもなるものは、みなこれに出席した。時によんだ芭蕉の句に、

木曾のやせもまだなほらぬに後の月

かくて草庵にとどまること幾日、越人は、荷兮の僕をつれて、名古屋へさり、芭蕉は、以前のさびしい一人となつた。

冬ごもりまたよりそはんこの柱

盗人にあうた夜もあり年の暮

去年のわび寝をおもひだして、

二人みし雪はことしもふりけるか

越人へかうした句をおくつたりした。

七五 奥の細道

あくれば元禄二年、芭蕉四十六歳の春早々、名古屋の荷兮によつて、これも「七部集」の一なる「あら野」九卷がなつた。をさめられた門人の句中には、

何ごとぞ花みる人の長刀 去來

湖の水まさりけり五月雨

おもしろや理屈はなしに花の雲 越人

簾してすゞしや宿の這入口 荷兮

しんしんと梅ちりかゝる庭火かな

草かつて董えりだす童かな 鷗歩

汐ひいて藻の花しほむ暑さかな 兒行

河骨に水のわれゆくながれかな 芙水

世をはやく妻のみまかりける頃

水無月の桐の一葉とおもふべし
目に青葉山時鳥はつがつを
雪の日や船頭殿の顔の色
野水 素堂 其角

庵のるすに

すびつさへすごきに夏の炭俵

深川の庵にて

庵の夜もみぢかくなりぬすこしづつ
嵐雪

初雪やまづ草履にてとなりまで
路通

幼子のひとり飯くふ秋の暮
尙白

木枯や里の子のぞく神輿部屋

霜のあとせんだんの實のこほれけり
杜國

などがあり、いづれも師の目ざすところを合點して、いはゆる正風の體は、この頃に確定した。

けれど芭蕉は、その儘江戸にとどまつて、一派の目標ミなつてゐることができなかつた。またも行脚、しかも奥羽各地への大旅行をおもひたつた。既往兩度の旅行によつて、芭蕉が自然にしたしむ心は、いやましつのでつた。はた野末の雨に身をそほち、葺の宿に寒をかこつ旅のうさ、つらさが、さながらの俳諧ともおもはれた。むしろさうした生活が、わび人自分の性格にかなつてゐるやうにおもはれた。

『無常流轉の世にすむ身には、他郷これわが郷ぢや。旅こそもつともふさはしい住家ぢや。』そんな風にもかんがへられ、しかも、

『人のゆきつけぬ奥の細道にこそ、一入物さびた風情はあるのぢやらう。』と、こゝに奥羽行脚をおもひたつたのであつた。

が、人のゆきつけぬ僻地だけに、この旅容易の旅ではないらしかつた。さきには「野ざらしを心に」江戸をでたが、今度こそは、どうやらその野ざらしが事實になりさうであつた。平生「無常」の二字を胸におき、月にも花にも流轉の相をみ、喫茶餐飯かつて一死をわすれなかつた芭蕉には、それはうれふべきことではなかつた。

『古人もあまた旅でしんだ。』かうおもふと、旅でしぬのが、何とやらのぞましくもあつた。
「澁笠の銘」に、

草の扉にひとりわびて、秋風さびしきをりをり、竹取のたくみにならひ、妙観が刀をか
りて、みづから竹をわり、竹をけづりて、笠づくりの翁となれる。心しづかならざれば
日をふるにもうく、たくみつたなければ、夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね
ゆふべにほして、またかさね、またかさね、澁といふものをもて、色をさはし、ますま
すかたからんことをおもふ。二十日すぐる程にこそ、やゝいできにけれ。その形、裏の
方にまきいり、外さまにふきかへるなど、荷葉のなかぼうくるにて、なかなかをかし
き姿なり。さらばすみかねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。西行の富
士見笠か。東坡居士が雪見笠か。宮城野の露に供つねば、吳天の雪に杖をやひかん。
霰にさそひ、時雨にかたづけ、そとろにめでて、ことに興ず。興のうちにして、にはか
に感ずることあり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、假のやどりに袂をうるほして、みづ
から笠の裏にかきつけはべる

世にふるはさらに宗祇のやどりかな

ごあり、旅でしんだ宗祇法師の生涯は、芭蕉の平生ふかく想望したところであるが、今奥
羽行脚をおもひたつにおよんで、ことにその情が切であつた。

『さうぢや、自分も旅でしなう。旅でしぬつもりで旅にでやう。それでこそ、あくまで自然
にしたしむこともできるのぢや。心に生還を期したのでは、みるどころ、きくところが、み
んなうはの空になつてしまふ。』そんなことをおもつたあけく、

『あとに心ののこらぬやう。』と、春早々芭蕉庵を人にゆづり、その身は、一まづ杉風の別邸
採茶庵へとひきうつつた。

月日は、百代の過客にして、ゆきかふ年も、また旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬
の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして、旅を住家とす。古人もおほく旅にし
せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさはれて、漂泊のおもひやまず、海濱
にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の巣をはらひて、やゝ年もくれ、春たてる霞の
空に、白川の關こえんと、神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、

とる物手につかず、股引のやぶれをつどり、笠の緒つけかへて、三里の灸すゆるより、松島の月まづ心にかゝりて、すめる方は人にゆづり、杉風が別墅にうつりぬ。

また、

はるけき旅の空おもひやるにも、いさゝかも心にさはらんもむづかしければ、日頃すみける庵を、あひしれる人にゆづりていでぬ。この人なん、妻を具し、むすめ、孫などもてる人なりければ、

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

野ざらしの旅には、千里が同行した。去年の吉野ゆきには、杜國がこもなひ、木曾、更科へは、越人が行をこもにした。今度の奥羽旅行には、會長が随伴することとなつた。會長は前にもしるしたまほり、芭蕉庵のちかくにすみ、師のために薪水の勞をとるなど、もつとも忠實な門人であつた。其角、嵐雪などの諸門人も、この人の同行するがあつて、やゝすこしく心をやすんずることができた。

七六 まづ日光へ

吉日をえらんで、三月二十七日出發と決定した。門人、知人のむつまじいかぎり、前夜から採茶庵へあつまつて、送別の句やら、旅中の噂やらに一夜をあかし、翌朝未明うちつれてでた。有明の月は、あはあはしく西にかゝり、日頃みなれた富士の峰も、かすかに姿をあらはして、今日の首途をみおくるもののごまぐらであつた。

『上野、谷中の花をみるのも、またいつのことやら……』さうおもふと、死を決してゐる芭蕉だけに、さすがに心ほそかつた。

河岸には、船がまつてゐた。一同は、それへのつた。隅田川をさかのほつて、千住につき船をあがると、芭蕉の胸は、前途三千里のおもひにふさがつた。

『では御無事に……』

『さやうなら……』

『折角お氣をつけなさいまして……』

『では御機嫌よく……』だがひにのべるわかれの言葉も、たゞ涙であつた。

行春や鳥はなき魚の目は涙

これを矢立のはじめとして、芭蕉と曾良とは、奥羽街道の人となつた。人々は、道のほごりにたちならんで、うしろ影のみえるかぎりみおくつた。芭蕉らは、それをみかへりみかへり、

『耳になれて、目にみぬさかひ、萬一いきてかへつたら、二度あふこともあるぢやらう。』とさだめのないたのみの末をかけつゝ、北へ北へと歩をすゝめた。

なるべく身軽にと心がけたが、夜のふせぎの紙子一つ、浴衣、雨具、筆墨の類、さては心づくしの人の餞の品などは、さすがにとりすてることもできず、背中におうたので、芭蕉の瘦骨にはかなりこたへ、路次のわづらひとなるここがおびたゞしかつた。かくて道の程もはかどらず、その日の夕刻、やうやく草加の宿にとたどりついた。

翌日は、木花咲耶姫をまつつた室の八島に参詣し、途中に二泊して、三十日は、日光山の麓にとまつた。主のいふやう、

『手前は、名を佛五左衛門とまをします。よろづ正直を第一にいたしますので、世間の人がそんな名をつけたのでございます。むさい宿ではありますが、どうぞうちまけておやすみなさいませ。』かういつて、心ばかりは二人をねんごろにもてなした。旅では人のなさけがうれしい。芭蕉は、

『どうした佛が、こんな濁世に示現して、自分たちのやうな乞食巡禮もいふべきものを、おたすけくださるのやら？』とおもひながら、その様子をみるのに、たゞ無智無分別で、正直一途の偏固ものらしかつた。聖人の語に、

剛毅木訥、仁にちかし。

ごあるのにもおもひあはされ、天賦の清質、なるほどとおもはれた。

あくれば四月一日、二人は、日光山にのほつて、東照宮を拜した。この山、もと「二荒」ミカいて、ふたらとよんだのを、延暦元年さいふに、下野の國芳賀郡の人釋勝道が、こゝに神宮寺をはじめむるにおよび、僧らは、往々にくわうミ音讀した。のち佳字をえらんで、「日光」とかくやうになつたものさか。土地の人は、その佳字をえらんだのを、弘法大師のこゝとし

て、芭蕉にかたつた。芭蕉は、

『千歳の未來をさとられたものとみえる。東照公のおかげで、今日泰平のもとるがさだまり六十餘州の人は、みなその御光をうけてをる。なるほど日光ぢや。』と、感激のあまり、

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は、霞がかりながら、まだ雪がしろかつた。

そりすて、黒髪山に衣がへ 會良

會良は、江戸を出發の曉、髪をそつて、墨染に姿をかへ、俗名の惣五郎を宗悟とあらためたのであつた。

二十町あまりも山をのぼると、一つの瀧があつた。身をひそめて巖窟をぬけ、瀧の裏からみるところから、その名を「裏見の瀧」といふのであつた。岩でたゞんだ洞のいたゞきからでる萬斛の水が、しぶきをとばし、霧をちらしつゝ、千尋の碧潭におちてゆく光景は、世にも壯觀のきはみであつた。

しばらくは瀧にこもるや夏のはじめ

七七 那須野ヶ原

那須の黒羽には、大關氏の館があり、館代の淨坊寺某といふは、かねて芭蕉と相しつてゐた。その弟桃翠は、俳諧をこのんで、つとに蕉門の一人であつた。芭蕉らは、それへとこゝろざし、那須野にかゝつて、はるかにみえる一村をめぐりて、雨にであひ、おまけに日をくらし、進退こゝにきはまつて、とある農夫の家にいり、こうて一夜の宿をかゝりた。

あくれば、またも野中をゆきゆくは、はからず野がひの馬がゐた。そばに草をかつてゐる男に、

『私どもは、黒羽へゆくものぢや。この廣野へさしかゝつて、おほきに難澁いたす。なんとこの馬をかしてはくださらぬか。賃料ははらひます。』とこうた。男は、こちらをみて、

『それはこまるが……』と迷惑けであつたが、かゝる僻土の野人にも、さすがに人の情はあつて、

『この那須野は、縦横に道がわかれてゐて、はじめての旅人では、ふみまよはれないともかぎりません。お氣の毒だから、おかしませう。たゞし、この馬のとまるこころで、おかへしてください。』

『それはありがたい。では、おかりまをしますぞ。』かういつて、芭蕉は、その馬にうちのつた。曾良は、荷物を鞍にしぼりつけた。

晩春初夏の那須野には、葦、蒲公英などの草花が、とりどりにさいてゐた。雲雀の聲もまれにはきこえた。四方の山々は、かすみながら、若葉の色の日々に緑ふかくなつてゆくのがおもひやられた。そよふく風もさむからず、悠々として馬をやる心もちは、いひしらず長閑であつた。馬のあとからは、子供が二人、小ばしりについてきた。一人は男、一人は女。これもあとにつよいいた曾良が、女の子に、

『名は、何といふの？』とふじ。

『かさねとまをします。』といふに、馬上の芭蕉は、

『きよなれぬ、しかしやさしい名ぢや。』とおもひながら、

かさねとは八重撫子の名なるべし
さりあへず一句を物した。

人里へくると、馬は、自然にこまつた。芭蕉は、質を鞍壺にむすびつけて、馬をかへし、黒羽の淨坊寺方へいつた。おもひかけぬ珍客に、主のよろこびはなく、日に夜にかたりつづけた。弟桃翠は、別に家をもつてゐたが、朝夕きては話をし、自分の家へまねいたり、親類中へ案内したりした。二人は、ゆく先々で歡待されながら、うかうかと幾日かをすごした。

ある日は、郊外にあそんで、犬追物の跡をみたり、那須の篠原をわけて、玉藻前の古墳をとつたりした。八幡宮にまうでると、案内の桃翠は、

『むかし源平屋島の戦に、那須與市宗高が、「別してはわが國氏神正八幡……」とちかつたのは、この神社でございます。』と説明した。芭蕉は、きいて神威の身にせまるをおほえた。

また修驗光明寺といふへまねかれて、行者堂を拜した。

夏山に足駄ををがむ首途かな

雲岸寺の奥に、かの佛頂和尚の山居せられた跡があり、庵の岩に、

たてよこの五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば
と、松の炭でかきつけられたよし、かねがねきよおよんでゐたので、一見しやうも、かの寺へ杖をひいた。

芭蕉の名は、このあたりへもきこえわたつたるて、所の若者たちが、大勢これにともなひ途すがらうちさわいでゆく程に、おもはずしらす山麓へついた。大分奥ぶかい山のやうで、谷道のはるかにつゞく方には、松や杉が黒々とおひしけり、苔がしたゞつて、四月といふのに、膚さむいくらるであつた。

のほりのほつて、十景のつくるあたり、橋をわたつて山門にいり、それよりかの跡をもとめて、さらにうしろの山をのほるこ、歌の五尺にたらぬ草庵が、石上をしめ、背後の巖窟へむすびかけられてあつた。芭蕉は、いまさらに和尚の高風がしのばれて、敬慕の念にたへなかつた。矢立をとりだし、庵の柱に、

木つゝきも庵はやぶらじ夏木立

との一句を題して下山した。

それより殺生石へゆくのに、淨坊寺氏は、馬でおくらせてくれた。するこ口取の男が、

『どうぞ短冊をいたゞかしてください。』といつた。芭蕉は、

『短冊?……やさしい所望ぢやな。』とわらひながら、

野を横に馬ひきむけよ時鳥

芭蕉と曾良とは、馬をつらねて、篠原をいそぐ程に、朝來どんよりとしてゐた空は、到頭雨になつた。やむなく高久といふに一宿して、

おちくるや高久の宿のほとゝぎす

すると曾良が、

木の間をのぞく短夜のゆめ

と脇をつけた。

翌日にいたつて、やうやく殺生石をみた。石は、温泉のぞる山陰にあつて、毒氣がまだうせず、そのあたりには、蜂や蝶のたぐひが、地面のみえないまで、おちかさなつてしんでゐた。

道のべの清水ながるゝ柳かけしばしとてこそたちとまりけれ

西行法師のこの歌でしられた「清水ながるゝの柳」は、蘆野さいふところにあつて、田の畔にのこつてゐた。江戸にある日、この地の郡守戸部某が、

「一度「清水ながるゝの柳」をおみせしたい。」など、時々いつてゐたが、今日こそその柳の蔭にたちよつた。

田一枚うゑてたちさる柳かな

かくて一旦淨坊寺氏へかへり、あつく連日の禮をのべて同家を辭し、桃翠その他にみおくられて、さらに道を北へとつた。

七八 白河の關

黒磯をすぎ、黒田原をすぎて、わざと舊街道を白河の關にかゝる頃、眞に「旅」といふ心もちになつた。むかし平兼盛が、この關へきて、都さほしの感にたえず、

たよりあらばいかで都へつけやらむけふ白河の關はこえぬと

とよんだのも、なるほどとおもはれた。

「この關は、日本三關の一つで、風騒の人は、たれとて心をとめぬはない。」とおもふにつけて、芭蕉らは、身にしみじみと旅愁を感じた。をりから夏のはじめとて、秋風は耳にのこし紅葉は佛にしのぶの外はなかつたが、青葉の梢が、一入あはれあるさまにながめられた。

早苗にもわが顔黒き日數かな

むかし能因法師は、都にあつて、

都をば霞とともにたちしかど秋かぜぞふく白河の關

と詠じ、さておもふに、自分ながらもこれ名歌、むざむざと人にみせるはをしいものと、爾來日をかさねて庵にこもり、顔を日にほし、色のまつ黒々になつたところで、まこと奥州からかへつたもののやうにみせかけて、諸人に披露し、賞讃を博した。その能因は、「秋かぜぞふく」といつた。今は早苗の夏ながら、江戸をたつて正に二個月、芭蕉の顔色も、大分日にやけてゐた。

風流のはじめや奥の田植唄

それは、奥州へきてはじめてきく田植歌であつた。

關のあたりには、卯の花のまつ白なところへ、茨の花さへさきそうて、雪にもまさる心地があつた。

卯の花をかざしに關の晴着かな 會良

關のむかふは阿武隈川の上流。それをわたつて、矢吹のあたり、影沼といふをとほつたがその日は空がくもつて、物の影もうつらなかつた。

ついで須賀川の驛へつくと、そこには門人等窮がゐた。等窮は、はじめ貞門の未得にしたがひ、のち芭蕉に入門した人で、この驛の長をつとめ、通名を伊左衛門といつた。芭蕉がたづねてゆくと、非常によるこんだ。芭蕉も、

『むかしは、陽關をでて故人がなかつたが、今は、白河の關をでて故人があつた。』かういつて悦にいつた。

ときに等窮は、

『白河の關は、いかゞおこえになりました?』と問うた。芭蕉は、

『長途のつかれに、身も心もやすからず、かつ風景に魂をうばはれ、懷舊に腸をたつて、なかなか句案どころではなかつた。しかし無下にこえるのも、流石に残念ぢやつたから、たゞ一句……』といつて、右の「田植唄」の句をしめした。等窮は、

覆盆子ををりてわがまうけ草

さ脇をつけ、會良は、

水せきて晝寝の石やなほすらん

と第三をつゞけて、つひに一卷とした。

須賀川のかたはらに、おほきな栗の木陰をたのんで、世をのがれすむ僧があつた。芭蕉は自分の生涯にひきくらべて、その僧なつかしく、

栗といふ文字は、西の木さかきて、西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも、柱にも、この木をもちゐたまふとかや。

世の人のみつけぬ花や軒の栗
と物にかきつけた。

四日五日を等窮方に逗留してのち、同家を辭し、阿武隈川にそうてくだるに、檜皮の驛があり、五里程はなれて、路のちかくに淺香山があり、その邊には、沼がおほかつた。おひおひかつみをかる時季にちかいよし、きいてゐたので、あふ人毎に、

『どの草を花かつみといふのでせう？』とさうてみたけれど、たれ一人しつてゐるのはなかつた。沼をめぐり、人にたづね、花かつみ、花かつみといつてある程に、日も山の端にかたむいた頃、二本松から右にきれて、黒塚の岩屋を一見した。

そもそも黒塚といふは、謡曲の「安達ヶ原」には、

ワキ「いそぎ候程に、これははや陸奥の安達ヶ原につきて候。あら笑止や、日のくれて候。このあたりには、人里もなく候。あれに火のみえ候程に、たちよりて宿をからばやと存じ候……不思議や主の閨のうちを、物の隙よりうかゞへば、濃血たちまち融滌し、臭穢はみちて肪脹し、膚膩ことごとく爛壞せり。人の死骸は敷しらす、軒とひきしくつみおきたり。いかさまこれは音にきく、安達ヶ原の黒塚に、こもれる鬼の住家なり。ッ
レ「おそろしや、かゝるうき目をみちのくの、安達ヶ原の黒塚に、鬼こもれり詠じけ

ん、歌のこゝろもかくやらんと、二人「心もまよひ肝をけし、ゆくべき方はしらねども足にまかせてにけてゆく。

とあり、また那智東光坊の祐慶阿闍梨といふが、宿をこの地にもとめた。主の老婆、宵の程は絲をくり、深更におよんで、山へ薪をとりにゆくに、祐慶は、不思議におもつて、その不在中、そつと部屋をのぞいてみた。おどろくべし、死骸をつむこと山のごとくであつた。

『こりやたまらぬ。』と、膽をけしてにけだした。老婆は、

『おのれにがしてなるものか。』と、しきりにあとをおつかけた。祐慶は、法術をつかつて、やうやくにけをはせるこゝろができたなどいふ傳説も、つとに世におこなはれた。そのおこりは、むかし源重之が、國司となつて陸奥にくだつたとき、國府にちかい名取郡の黒塚といふところに、數多の妾をかこひおくよし、都へきこえた。平兼盛は、きいてをかしいことにおもひ、それらの女を人をとつてくふ鬼にみたて、黒塚の所在地陸奥の名取郡を安達ヶ原とあやまつて、

陸奥の安達ヶ原の黒塚に鬼こもれるときはまことか

とよみ、重之へおくつた。この一場のたはむれから、謡曲「安達ヶ原」ができ、祐慶阿闍梨の話が生まれ、安達ヶ原に黒塚といふ地名がおこり、岩屋まできづかれたといふわけで、その荒唐無稽談であることは、芭蕉にもわかつてゐたが、たゞ有名な話であることに多少の興味を感じ、これも旅人にふさはしいわざと、とにかく一見したのであつた。

その夜は、福島に一泊した。

七九 「しのぶ文字摺」

翌日は、「しのぶ文字摺」の石をたづねて、忍の里へいつた。おほきさ方二間ばかり、山かけの谷間に、なかばうもれてゐるのを、子供がきてをしへてくれた。女のおもひが、この石になつたとかで、表面に文字があり、草でするさあらはれるよしいひつたへ、古歌にも、

みちのくのしのぶ文字摺たれゆるゑにみだれそめにしわれならなくに

など、戀によせてよむの例であつた。もと山の上にあつたのを、往來の人が、田の麥草をとつては、すりこゝろみるので、里の人たちは、非常に迷惑がり、つひにこの谷へころがし

てしまつた。しかも表面が下になつたので、今はさうした風情もなく、風雅の昔にかはつたのがをしまれながら、さすがに懐舊のおもひなきをえなかつた。

早苗みる手もとやむかししのぶ摺

月の輪のわたしをわたると、やがて瀬の上といふ驛へでた。義經の忠臣繼信、忠信兄弟、兄弟の父佐藤庄司元治の舊跡は、左へはいること一里半ばかりの山際、飯坂の里鯖野ときいて、たづねたづねゆく程に、丸山といふへたづねあたつた。そこが一家の館のあつたところだ、山の麓の大手の跡など、人のをしへるがまゝに、涙ながらみた。かたはらの古寺に一家の石碑があつた。中にも二人の嫁のしるしが、まづあはれであつた。

『女ながらも、かひがひしい名をのこしたものはある。』と感にえたへで、袂をぬらした。

寺へはいつて茶をこふと、義經の太刀、辨慶の笈などが、寶物になつてゐた。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

それは、五月朔日のことであつた。

その夜は、飯坂にとまつた。温泉へはいつて、さて宿をみると、土間に藁をしくなど、あ

やしけな貧家で、灯もなければ、圍爐裏の火かけに寢床をまうけてねてゐるさ、夜にいつて雷がなりだし、しきりになりはためく程こそあれ、大雨がふつてきて、ねてゐる上へもるさわぎ。おまけに蚤や蚊にせよられて、徹宵ねむられないさへあるに、芭蕉は、持病の痔疾がおこつて、ほとんどきえいるおもひをした。

短夜の空もおひおひあけて、またも旅だつた。昨夜のなごりで心がすゝまず、馬をかりてやつと桑折の宿へでた。

『とほい行末をかゝへて、今この病とは、さてさて覺東ないことではある。』と、悲歎の下から、

『いやいや、かうして行脚にで上たからは、捨身無常は覺悟のまへ、道路にしぬのも天命ぢや。』と、われと氣力をとりなほし、縦横に道をふんで、伊達の大木戸をこえた。

それより鑑摺、白石の城をすぎ、名取郡へはいつて、土地の人に前中將實方の墓をたづねると、はるかに右の方をゆびさして、

『あの山際の里を、箕輪、笠島といつて、中將の墓は、そこにあります。道祖神の社、かた

みの薄も、のこつてをります。』このことであつた。けれどこの頃の五月雨で、道も非常にわるく、かつ體がつかれてゐたので、よそながらながめやつて、そのまゝうちすぎながら、

『箕輪ぢやの、笠島ぢやのと、五月雨のをりにはふさはしい。』と、

笠島はいづこ五月のぬかり道

かくてその夜は、岩沼にとまつた。

武隈の松こそ、みるからに目のさめる心地があつた。奈良朝の昔、蝦夷にそなへて、多賀城をおかれる前から、この地に鎮所があり、その庭にうゑられたのが、この松のおこりであるとか。しかるに、ある年陸奥守としてくだつた人などは、名取川の橋杭につかつたくらゐで、きつたり、うゑついでりして、幾度も代はかはつてゐるに相違ないが、今みても、根が土際から二本にわかれ、千歳の形をそなへてゐるところは、むかし同様と察せられ、めでたい松のけしきであつた。江戸をたつとき、舉白は、

武隈の松みせまをせ おそ櫻

こ錢した。よつて、

櫻より松は二木を三月ごし

「後拾遺集」のするところ、橘季通の歌に、

武隈の松は二木を都人いかどとはどみきとこたへむ

一つは、この歌をふまへての詠であつた。

八〇 仙臺の數日

名取川をわたつて、仙臺へはいつたのは、ちやうど菖蒲をふく日であつた。宿をもとめて四五日逗留することにした。

仙臺に加右衛門といふ畫工があつた。いさゝか風雅に心のあるものよし、人の噂にきこえたので、たづねて知人になつた。その言葉に、

『數年以來、由緒のはつきりしない名所を、いろいろしらべました。それへ御案内いたしませう。』とあつて、一日、あひともなつて、郊外へでかけた。いたるところ、宮城野の萩がおひしけつて、秋の景色がおもひやられた。玉田、横野、躑躅ヶ岡などは、あぜひのさくころ

であつた。日蔭ももらない松林へはいつて、

『こゝを木の下とまをします。昔もこのさほり露ぶかゝつたとみえて、古歌にも、

みさぶらひみかさとまをせみやぎの木の下の露は雨にまされり

とみえてをります。』と、加右衛門の話であつた。藥師堂、天神の社などを巡拜する程に、その日はくれた。

やがて仙臺をさるとき、加右衛門は、鹽竈、松島などの所在を、お手のもの繪にかいておくり、なほ紺の染緒をつけた草鞋を二足餞した。

『さてこそ風流のしれものぢやつた。この草鞋で、到頭本性をあらはした。』と、芭蕉は、心にうなづきながら。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

さてかの繪圖にまかせてたどる途すがら、山陰に十符の菅をみ、さらにすゝんで、多賀城の碑をみた。碑は、仙臺城下はづれの市川村といふにあつて、高さ六尺にあまり、幅三尺ばかりとみえた。苔がむして、文字はかすかながら、四方國界への里數をしるし、神龜元年、

按察使鎮守府將軍大野朝臣東人のおくまころで、天平寶字六年、參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣鸞の修造にかゝり、時に十二月一日である旨が、よみわけられた。

『一千年の間には、山はくづれ、川はおちて、道筋もかはり、石はうもれて、土中にかくれ木はおいくちて、若木にかはるといふ風で、一般には、場所さへ埋滅してしまふ例ぢや。しかるに今この碑は、うたがひのない千歳の記念で、かくまのあたり、古人の心をよむことができるのも、これ行脚の一徳ぢや。存命のよろこび、これにしくはない。』と、芭蕉ら二人は旅の苦勞をうちわすれて、しばし懐古の涙にくれた。

ついで野田の玉川、沖の石をたづねた。古人の歌に、

ちぎりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こさじこは

こあるその「末の松山」には、寺があつて、末松山といつた。松の間々は、のこらす墓原であつた。

『羽をかはし、枝をつらねて、「末の松山波こさじ」といつたちぎりの末も、結局かうなつてしまふのぢや。』とおもへば、かなしさもいやましつゝの折柄、鹽竈の浦にきく夕の鐘が、無

常流轉のいましめときよなされた。

時に五月雨の空も、いさゝかはれて、夕月夜のかすかな下には、籬ヶ島が、程ちかくうかんでゐた。こぎつれた漁船で、魚をわけるとて、いひのゝしる聲をきくにも、

みちのくはいづくはあれど鹽釜の浦こぐ舟のつなでかなしも

とよんだ心が、なるほどとおもひしられて、あはれであつた。

その夜とまつた宿では、盲法師が琵琶をならして、奥淨瑠璃といふものをかたつた。平家でもなく、舞でもなく、ひなびた調子をあけて、枕ちかくかきならし、うたひたてるのは、騒々しかつたけれど、さすがに邊土の遺響をつたへて、殊勝におもはれた。

八一 松島にあそぶ

翌早朝、鹽竈の明神へ參詣した。國守の再興とて、社殿をはじめ、石の階、玉垣など、かどやくばかりに拜せられた。

『かうした陸奥のはてまで、神威がさかんにましますこそ、すなはちわが國特有の美風で、

餘國にはおそらくあるまい。まことに神國の神國たるゆゑんぢや。』とおもへば、たふとさはひとしほであつた。

神前に古色蒼然たる寶燈があつた。金の扉にきざまれた文字は、「文治三年和泉三郎寄進」とよまれた。一たびみ、一たびよめば、勇義、忠孝の士の佛が、五百年後の今、面前にうかんで、まことにめづらしくおもはれた。

午ぢかい頃、舟をかりて、松島へとこゝろざした。その間二里あまり。やがて雄島の磯へついた。

そもそも、ことふりにたれど、松島は、扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖にはぢず。東南より海をいれて、江のうち三里、浙江の潮をたふ。島々の數をつくして、そばだつものは、天を指し、ふすものは、波に腹ばふ。あるは二重にかさなり、三重にたふみて、左にわかれ、右につらなる。おへるあり、かふるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉潮風にふきたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その氣色甯然として美人の顔をよそほふ。ちはやふる神のむかし、大山すみのなせるわ

さにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさん。

雄島は、陸からつゞいて海中へつきでた島で、島とはいひ條、實は半島であつた。有名な雲居和尚の別室の跡、坐禪石などがあつた。松の木陰のこゝ彼處には、落穂、松笠などのうちけぶる草庵がみえ、世をいさふ人が、しづかにすんでゐた。どういふ人が、その素性はわからぬながら、まづなつかしくおもはれて、たちよつてみると、十日の月が海にうつつて、晝間とはまた格別のながめであつた。

海岸へもどつて、宿をもこめた。二階の窓をあけはなつて、月の松島を枕の下にし、さながら風雲のうちに旅寝する心もちは、あやしくもいみじいものであつた。頭をかゝへて、しきりに句案にふけつてゐた會良は、

松島や鶴に身をかれ時鳥

つひにこの一句をえた。松島の景には、鶴こそふさはしい。といつて時鳥もすてがたい。あの時鳥が、鶴に身をかり、「車輪のごとし」さかゝれた翅をひろけて、江に横たはつてきてくれたらと、そんなことをおもつたのであつた。

けれど芭蕉には、一句もなかつた。たゞ口をとぢ、眼をとぢて、じつこねむらうとしたが、なんとしてもねむられなかつた。ふじ氣がつくと、江戸をたつとき、素堂は、松島の詩をおくり、原安適は、浦島の和歌をおくつた。また杉風、濁子の俳句もあつた。袋をといてこりだし、それを今宵の友とする程に、いつとはなしにねむつていつた。

短夜の夢はやぶれて、あくれば十一日、瑞巖寺にまうでた。むかし眞壁の平四郎といふが出家して唐山にいき、歸朝ののち、一寺をひらいたのが、この瑞巖寺で、のち雲居禪師の徳化によつて、結構光をくはへ、七堂藝をあらためて、つひに佛土成就の大伽藍はなつたのであつた。

十二日は、平泉へとこゝろざして、松島を發したが、その途中、人跡まれに、たゞ雉鬼、鶺鴒のみのゆきかふ徑を、どここもしろすゆく程に、つひに道をふみちがへて、おもひもよらず石の巻といふへでた。「黄金花さく」とよまれた金華山を海上にみわたし、數百の廻船が入江につどひ、地をあらそつて軒をならべた人家からは、竈の烟もたちつどくといふ、それはにぎやかな港であつた。

『不思議なこころへきたものぢや。』と、町中をうろつきながら、宿をもこめたが、宿をかすものもなく、こまりにこまつたあけく、やつまづしい小家にはいつて、一夜をあかすことができた。

八二 三代榮華の跡

あくれば十三日、またもしらぬ道へまよひでた。袖のわたり、尾ぶちの牧、まゝの萱原などをよそ目にみて、はるか堤の上やら、心ほそい長沼の畔やらをあるき、戸伊麻といふに一宿して、翌十四日、やうやくにして平泉へでた。この間、二十里あまりとおもはれた。

平泉、こゝこそ藤原氏三代の故地であつた、永保三年、清衡は、後三年の役の功によつて陸奥、出羽の押領使に任せられ、六郡を併有した。その子基衡をへて、その孫秀衡にいたり嘉應二年、鎮守府將軍となり、ついで陸奥守にのほり、一門富榮をきはめ、世に「お館」と稱せられた。

しかるに、この藤原氏は、もと蝦夷の出であつた。自然京官のあなどりをうけ、秀衡が鎮

守府將軍に任ぜられたときには、右大臣九條兼實は、

奥州の夷狄秀平、鎮守府將軍に任ず。亂世のもとるなり。

といきどほり、陸奥守に任ぜられたときには、

このこと、先日議定ありしことなり。天下のはぢ、荷ごとかこれにしかんや。かなしむべし、かなしむべし。

と痛嘆した。

その他基衡が、その建立にかゝる寺院の題額を、法性寺入道藤原忠通にもとめると、忠通は、いやしんであたへなかつた。

佛師運慶が、基衡のために佛像を彫刻して、黄金百兩、馬五十頭、水豹の皮六十枚、安達絹一千疋、布六千端などいふ法外な報酬をうけ、なほ他に絹を船に六艘むさほつたなども、相手をいやしんでのことであつた。

源義経は、少年の頃、この秀衡によつた。後年兄頼朝と不和になり、家來の武藏坊辨慶などをひきつれて、ふたゝび秀衡によると、秀衡は、陸奥、出羽二國の兵をもつて、義経を保

護した。

しかるに、秀衡がしんで、その子泰衡の代になるに、父の遺命にそむいて、義経を殺し、首を鎌倉に献じた。頼朝は、事のおくれたことをにくみ、兵を發してこれを討ち、藤原氏三代の榮華は、一朝にして夢となつた。

泰衡は、まことに不肖の子であつたが、この際感すべきは、泰衡の弟和泉三郎忠衡が、あつく義経をかばひ、ためにたゞかひ、ためにしぬまでも、父の志をうしなはなかつたことでその孝烈は、ながく人の子のかゞみとなり、その義烈は、はるかに士人の範となつた。

今芭蕉は、三代榮華の跡をとつた。大門の跡は、一里程手前にあつた。館の跡は、田野ミかはつて、金雞山のみが形をのこしてゐた。高館へのほつて、四方をみると、南部の方からながれてくる北上川、和泉の城をめぐり、高館の下で北上川へおちる衣川などが、一眸のうちにあつまつた。藤原氏のそなへは、衣ヶ關をへだてゝ南部口をさしかため、蝦夷をふせぐとみえた。

さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。國やぶれて山河あり。城

春にして草青みたり。

などおもひつゞけ、笠をうちしいて、時のうつるまで、涙をおとした。

夏草やつはものどもが夢のあと

卯の花に兼房みゆる白毛かな

會 良

かねてきよおよんでゐた經堂と光堂とでは、折柄開帳がおこなはれてゐた。經堂には、三代の像をのこし、光堂には三代の棺ををさめ、三尊の佛を安置してゐた。普通ならば、七寶はちりうせ、珠の扉は風にやぶれ、金の柱は霜雪にくちて、つぎにも頽廢し、いたづらに空の叢みなるべきであつたのを、あらたに四方に塀をまうけ、屋根をふいて雨風をしのぐなど、暫時千歳の記念とはなつた。

五月雨のふりのこしてや光堂

その夜は、南部道はるかにみやつて、岩手の里にとまつた。

八三 出羽の山中

五月十五日、岩手を發し、これより出羽の國へこえやうと、小黑崎、みつの小島などいふところをすぎて、鳴子の湯から、尿前の關にかゝつた。しかるに、旅人のまれな道きて、關役人にあやしまれ、やつのおもひで、通行をゆるされた。

さて峠へのほりかゝつた頃、日がくれたので、國境をまもる封人の家をかかへて、一泊をもとめた。しかるに風雨のためにさまたげられて、たつこまができず、よしなく山中に逗留するこゝ三日間、かなりくるしいおもひをした。

蚤虱馬のしとする枕もと

主人の言葉に、

『これから出羽までは、ほとんど山ばかりで、道もはつきりとはついてゐません。案内者がなくては、とてもゆかれますまいよ。』こゝあつた。芭蕉らは、きくからに膽をひやし、

『では、案内者をたのんでいただきますせう。』

『ようございます。』といつて、早速一人の若者をたのんでくれた。それは倔強な若者で、そり脇差をさし、櫛の杖をもつて、先にたつた。

『けふこそは、あやふい日にあはにやなるまい。』とおもひながら、二人は、こわこわそのあ
まにしたがつた。

果然主人の言葉はちがはなかつた。國境の高山は森々として、一羽の鳥の聲もきかず、斧
斤のはいらぬ木の下は、しけりにしけつて、夜ゆくがごとくであつた。篠の中をふみわけ
ふみわけゆく程に、水にすべり、岩につまづいて、冷汗をながすのもいくたび、やうやくに
して最上の庄へでた。

二人がほつとしたごとく、若者も安堵の様子で、

『この道では、大概怪我があります。無事おくりすることができたのは、まことに幸運で
した。』かういつてよろこんだ。それをきいても、二人は、胸のとどろくおもひがあつた。

最上の庄の尾花澤には、清風さいふがるた。富人ながら、志もいやしくなく、京都へも時
々かよつて、さすがに旅の心もしつてゐたので、日をかさねてひきこめ、長途の勞をなくさ
め、さまざまに欺待した。

すゞしさをわが宿にしてねまるなり

はひいでよかひやが下の墓の聲

まゆはきをおもかけにして紅の花

蠶飼する人は古代の姿かな

曾良

山形領に立石寺といふ山寺があり、慈覺大師の開基で、こゝに清閑な地であるとかで、人
々は、

『是非御覽なさるがよろしい。』とすゝめた。

『では……』と、それへ歩をすゝめた。その間七里ばかり、日もまだくれねば、麓の寺に宿
をかりておいて、山の上の堂へのほつた。山は、巖に巖をかさねてなり、松も柏も年をへて
土石までが、おいて苔なめらかに、岩の上の院々は、扉をとちて、物の音一つきこえなかつ
た。岸をめぐり、岩をはつて、佛閣を拜すると、寂寞境裏、たゞ心のすみゆくをおほえるの
みであつた。

しづかさや岩にしみいる蟬の聲

最上川をくだるつもりで、大石田に日和をまつた。この地には、古風の俳諧をするものが

あつて、いづれも新古の二道にまよひながら、指導者をえず、たゞたゞ遺憾におもつてゐたよつて句會をもよほし、歌仙一卷をとどめた。しらぬ他郷、しかもかうした僻土の山間に、正風の種をこほすこと、まことに風雅のきはみであつた。

最上川は、山形を水上とし、碁點、隼などの難所があり、板敷山の北をながれて、酒田の海へはいるのであつた。兩岸は山で、木々のしげつた中を船をくだした。これに稻をつんだのを、「稻舟」といふらしかつた。白絲の瀧は、青葉の隙々におち、仙人堂は、岸にのぞんでたつてゐた。をりからの五月雨に、河水がみなぎつて、随分危険なおもひがせられた。

五月雨をあつめてはやし最上川

六月三日には、羽黒山へのほつた。圖司左吉といふものをたづね、その紹介で、別當代會覺阿闍梨にあつた。阿闍梨は、芭蕉らを南谷の別院にとめて、懇切に待遇した。

四日には、本坊で俳諧興行があつた。

ありがたや雪をかほらす南谷

五日には、羽黒權現祠三山神社にまうでた。延喜式に「羽州里山の神社」とあるのは、黒を

あやまつて、「里」とかいたものらしく、「羽州黒山」の中を略して、「羽黒山」といふのかとおもはれた。「出羽」なる國名も、鳥の羽毛をこの國の貢に献するさだめのよし、風土記にみえるこのことであつた。月山、湯殿をあはせて三山とし、權現祠は、三山の鎮護であつた。寺は、眞言宗を奉じ、江戸の東叡山に屬してゐた。開山能除大師は、いつの時代の人やら、不明であつた。僧坊數多棟をならべて、修驗行法をはけまし、靈山の效驗のいちじるしさは、人のたつとびかつおそるゝところであつた。

八日には、月山にのほつた。異装の強力にみちびかれて、雲霧にさまよひ、山氣身にせまるなかを、氷雪をふんでのほること八里、さらに日月行道の雲關にいるかとうたがひ、息もたえだえに、膚身のことえるおもひをしながら、頂上へのほりつくと、日は没して、月がでた。笹をしき、篠を枕として、一夜をあかし、翌朝、日がでて、雲のきえるころ、湯殿へくだつた。

ふと氣がつくと、谷のかたはらに鍛冶小屋といふがあつた。「月山」と銘をきつて、世に賞せらるゝ名劍は、この國の鍛冶が、こゝに潔齋してうつのであつた。

岩に腰かけて、足をやすめるつひ、眼の前に、三尺ばかりの櫻の木があつて、半開の苔をつけてゐた。ふりつむ雪にうもれては、さくに時なく、おくれながらも春をわすれぬ遅櫻の心こそ、世にもわりなくおもはれた。

すべてこの山中の微細、行者の法式を禁ず。よりて筆をとゞむ。坊へかへると、阿闍梨のもとに應じて、三山順禮の句を、短冊にかきつけた。

すゞしさやほの三日月の羽黒山
雲の峰いくつくづれて月の山
かたられぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道の涙かな
曾良

八四 越路の旅

羽黒山を發し、左吉同道、鶴ヶ岡城下の長山重行にむかへられて、歌仙一卷があつた。さらに川舟で酒田港にくんだり、淵庵不玉といふ醫師の許を宿とした。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
あつき日を海にいれたり最上川

象潟は、酒田から東北へ十里程きこえた。山をこえ、磯をつたひ、砂をふんでゆきゆくほどに、日のやうやくかたむく頃、汐風さつと眞砂をふきあげ、雨が濛々こふつてきて、鳥海山も雲にかくれた。蟹の苦屋に一夜をあかし、翌朝の好晴にいさみたつて、舟を象潟にかべた。

さて、まづ能因島に舟をよせて、三年幽居のあみをとひ、むかふの岸へあがると、西行法師の歌に、

象潟の櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟

とよまれた櫻の老木が、法師の記念をのこしてゐた。干満珠寺をとひ、方丈にすわつて、簾をまくと、鳥海山は天をさへへて、影を湖上におとし、堤上を通ずる秋田道、波のうちいる汐越など、風景たゞ一目下につきた。

この湖の廣さは、縦横一里ばかりもあり、面影が松島にて、またことなつてゐた。松島

は、わらふがごとく、象潟は、うらむがごとくであつた。さびしさにかなしさをくはへて、ほとんど人の魂をなやますものにてゐた。蘇東坡は、西湖を詠じて、美人西施に比した。よつて、

象潟や雨に西施がねぶの花
また、

汐越や鶴はぎぬれて海すとし
をりから土地の祭禮に、

象潟や料理なにくふ神まつり
岩上に唯鳩の巢のあるのをみて
會良

波こえぬ契ありてやみさごの巢
時に美濃の商人低耳といふがゐて、
同

蟹の家や戸板をしいて夕すどみ
酒田に幾日かを逗留して、さらに北陸道の雲をのぞむと、はるばるのおもひが胸をいたま

しめて、さすがに溜息がつかれた。加賀の金澤までは、百三十里とのことであつた。鼠ヶ關をこえるご、そこからは越後の國。一日、出雲崎といふにとまつて、

荒海や佐渡によこたふ天の川
のち「銀河の序」をつくつて、

北陸道に行脚して、越後の國出雲崎といふところにとまる。かの佐渡が島は、海の面十八里、滄波をへだて、東西六十五里によこたはりふしたり。峰の嶮難、谷の隅々まで、さすがに手にとるばかりあざやかにみえわたる。むべこの島は、こがねおほくいで、あまねく世の寶となれば、めでたき島にてはべるを、大罪、朝敵のたぐひ、遠流せるよによりて、たゞおそろしき名のきこえあるも、本意なきことにおもひて、暫時の旅愁をいたはらんとする程、目すでに海にしづみて、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きらきらとさえたるに、沖の方より波の音しばしばはこびて、魂をけづるがごとく、陽ちぎれて、そとろにかなしびきたれば、草の枕もさだまらず、墨の袂、何故ともなくてしほるばかりにんはべる。

かうしるした。

七月六日には、直江津へきた。

文月や六日も常の夜にはにす

月のない六日ながら、七夕の前夜とおもへば、常にかはらぬ空の景色も、常にかはつてながめられたのであつた。

高田に醫師細川青庵をまひ、それより能生へきた。この里に「汐路の鐘」といふがあつた。いつの時代にできたものやら、鐘の銘もあつたけれど、多年汐風にふきくされて、わからなくなつてゐたのを、のち常陸坊が追銘した。不思議なこゝには、毎日満潮のときには、この鐘自然になりだして、一里四方にきこえわたつた。かくてこの里のものは、海士の子にいたるまで、潮の満干をしつてゐたが、をしいかな明應のころ、やけてなくなつた。けれど、そのやけのこりの銅をつかつて、能登の國中居浦の鑄物師某が、今の鐘をいかへしたとこのこゝであつた。

曙や霧にうづまく鐘の聲

越後の國を一過して、越中の國市振の關へきた。酒田を發してこゝに九日。その間、芭蕉は、暑氣と濕氣になやまされ、病氣がおこつて、事をしるす心もしなかつた。

この日は、親不知、子不知、犬もどり、駒返などいふ北國一の難所をこえて、體がひどくつかれたので、枕をひきよせてねると、一間へだてた隣の部屋で、わかい女の聲が、二人ばかりときこえた。年とつた男の言葉もまじつて、物語するのをきけば、越後新潟の遊女で、今度伊勢參宮をするについて、この關まで、男におくられてきたが、あすは故郷へかへす手紙をしたため、はかない傳言などをしてやる様子で、

『つらい苦海へ身をしづめて、なほその上に、日々業因をつくらにやならぬわたしたちは、何さいふ運のわるいうまれでせう。』など、たがひに身の上をなげきあふのであつた。

翌朝のたちぎはに、遊女二人は、芭蕉の前に手をついて、

『しらぬ他國へ、しかも女ばかりの長旅で、行先の程も、覺束なう存じますゆゑ、みえがくれにでも、お跡をおしたひまをします。法衣の上のお情に、大悲をたれられました、結縁おさせくだされますやう、おねがひでござります。』こちらを憎みたのであらう、かういつて

涙をながした。不便にはおもひながら、

『ところが、わしどもは、諸所にとまるどころがおほいからこまる。たゞ人のゆく方へゆかれよ。神明の御加護で、かならず無事にすむぢやらうから。』といひすて、出立したが、しばらくはあはれさがやまなかつた。

一つ家に遊女もねたり萩と月

やがて加賀の國へはいつた。

わせの香やわけいる右は有磯海

かくて卯花山俱利伽羅峠をこえ、木曾義仲の昔をしのんで、

義仲の寢覺の山か月かなし

の詠があり、北地の秋色を賞しつゝ、金澤へついたのは、七月十五日であつた。

八五 加賀ところどころ

金澤では、かねてあひしる大阪の商人某にであひ、それと同宿した。この地の一笑いふ

ははじめ梅盛にしたがつて、真風をまなび、のち蕉門に歸して、人にもしられた俳人であつたが、去年の冬、世をはやくしたとのことで、その兄が、追善をもよほした。

塚もうごけわがなく聲は秋の風

けだし芭蕉からの消息に、

……お約束の水雞笛、おくりたまはり、かたじけなく、珍重にぞんじ候。この里の人々きゝなれず、女子供あつまり、われを藝者のやうにまをし、をかしく候。行脚さき、國ところにより、一向音をしらぬ人ごさ候間、きかせまをすべくと、よろこびまをし候。鹿笛も木曾よりもらひまをし候。ほとゝぎす笛もごさ候はゞ、ほしきものに候。水雞笛つくる人は、つくるべくとぞんじ候。御面倒ながら、これもおきゝくださるべく候。でき候はゞ、おたのみくださるべく、たのみいりまをし候。何にても、相應のぞみもの細工人に謝禮いたすべく候。殺生の道具ながら、水雞笛、鹿笛も、たゞふくはをかしくはつ雁の聲、水雞のたゞくなど、歌にも發句にもつくる人の、さし竿にてとり、あみにかげなどいたし候は、口と心と相違にて、名句はき候さも、うそつきといふものに候へ

ば、まことの風人からみれば、あはれなることにて……かの開籠放_ニ白鶴_一の詩意など教訓なざるべく候……

うぐひすや餅に糞する様の先

二月十六日

芭蕉庵

一笑様

などいふのがあり、師弟のしたしみも、世のつねではないのであつた。

その他、北枝、その弟收童、秋の坊、萬子、如柳、李東など、正風を宗とする數多の俳人があつて、一日、小春亭に歓迎の句筵をまうけ、山海の珍味を供した。筵はてゝ、いざ退散といふとき、一同は、さらに後會を約せやうとした。芭蕉は、

『今度のもてなし、志の程は、言葉にものがたい。たゞ遺憾は、風雅のさびのないことぢや。自分は、浮世を寄邊さだめずに、野末に晝寢の夢をむすんだり、山中に一むらの雨をしのいだりして、さびしくすごす世すて人ぢや。かやうな珍味は、おそらく風流の本意ぢやない。』といましめ、しめすに、

白露のさびしき味をわするゝな
の舊詠をもつてした。

それらの諸俳人中、北枝がもつとも傑出してゐた。芭蕉は、金澤への途中、

あかあかと日はつれなくも秋の風

と詠じ、金澤へくると、「秋の風」を「秋の山」として、北枝にみせた。北枝は、「三度うち吟じた末に、

『結構にうけたまはります。けれど「山」よりも、「風」の方がいゝでせう。』といつた。芭蕉は、すくなからずおどろいて、

『いや、貴丈をこゝろをみたのぢや。貴丈がをられるからは、わが俳諧も、きつとこの地におこるぢやらう。』さうなづき、

『貴丈は、實に北方の逸士ぢや。』とまで激賞した。

ある庵へさそはれて、

秋すゝし手毎にむけや瓜茄子

ある日は、勾空といふを卯辰山の閑居柳陰軒にとうて、

ちる柳あるじもわれも鐘をきく

さ吟じてさつた。

逗留數日ののち、北枝におくられながら、金澤を渡し、後年千代のでた松任へきた。時に裸馬に策うつて、あわたゞしくやつてきたのは、萬子であつた。その日萬子は、他へでてゐて、芭蕉にあふことができなかった。それを遺憾として、歸宅早々、あとをおつたとのこゝろであつた。萬子は、

『ほんの餞のしるしまでに……』といつて、白衣一つと金三兩をさしだした。芭蕉は、その志のあついのに感じながらも、

『金銀は、盗人をひく種になるばかりぢやから……』といつて辭退し、たゞ白衣のみをうけて、やがて小松へきた。

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

八六 齋藤實盛の兜

小松では、太田神社へまうでた。寶物に齋藤實盛の兜があつた。實盛が最初源氏に屬してゐたころ、源義朝からたまはつた兜とかで、いかさま平士のものとはみえず、目庇から吹返まで、金をちりばめた菊唐草の彫刻があり、龍頭に鉞形をうつたあたり、その人をしのばしめた。實盛討死ののち、木曾義仲が願狀をそへて當社へ奉納したこゝろ、その際樋口次郎兼光が使者にたつたことなど、すべて縁起にみえてゐた。

むざんやな兜の下のきりぎりす

白根が嶽をあとにみて、山中の温泉へむかふ途中、左の山際に觀音堂があつた。むかし花山法皇が、三十三所の巡禮をとけさせられてのち、大慈大悲のお像を安置したまうた靈跡で「那谷」といふのも、法皇の御命名にかゝるこのことであつた。萱ぶきの小堂は、岩の上に建立せられ、奇石さまざまに、古杉をうゑならべたなど、殊勝の土地であつた。

石山の石よりしろし秋のかぜ

山中の温泉に浴した。その效能のいちぢるしさ、有馬につぐとのこみであつた。

山中や菊はたをらぬ湯のにほひ

宿の主人は、桑之助といつて、まだ小童であつた。その父は、俳諧をよくし、貞室がまだ若輩のころ、この地へきて、風雅にはづかしめられ、にぐるがごとくに都へかへつて、貞徳の門にいり、つひに一世の俳人となつた。よつて貞室は、この一村からは、かたく黠料をうけなかつたとか。父なる人も、貞室も、つとに世をさつて、今はすべて昔がたりになつたのも、感慨ぶかくおもはれた。

この頃曾良は、胃腸をそこなひ、伊勢の長島にゐる縁邊をたよつて、先だつて出發した。ゆきゆきてたふれふすとも萩の原

とは、曾良そのときの句であつた。芭蕉は、「ゆくもののかなしび、のころものうらみ、隻鳥のわかれて、雲にまよふがごと」き心地をしながら、

けふよりや書付けさん笠の露

大聖寺へくると、城外の全昌寺といふに一泊した。こゝも加賀の地であつた。曾良も、前

夜この寺にこまつて、

よもすがら秋風きくや裏の山

の句をのこしていつた。芭蕉は、一夜のへだてに、千里のおもひがせられた。これも秋風をきくつゝ衆寮にねるこ、曙の空ちかく讀經の聲のすみゆくまゝに、やがて鐘板がなり、食堂へはいつた。けふは越前へとおもへば、何となく心もせき、早々に堂をおりると、わかい僧などが、紙や硯をもち、階の下までもおつてきて、

『どうぞ一句……』とせがむのであつた。をりから庭の柳のちるをみて、

庭はいていづるや寺にちる柳

草鞋ながらかきすてゝさつた。

越前境の吉崎では、入江に舟をさをさして、汐越の松をみた。西行法師が、

よもすがら嵐に波をはこばせて月をたれたる汐ごえの松

と詠じたこともあり、

『この一首で、すべての景をつくされてをる。この上一辯をそへるのは、無用の指をたてる

のも同然ぢや。』このみ、芭蕉は、無言でこの地をさつた。

丸岡天龍寺の長老は、芭蕉とかねて相識の仲であつた。よつてとうて一宿した。北枝は、たゞかりそめにみおくつてでたのが、わかれかねて、今すこし、今すこしと、到頭こゝまでおくつてきた。「北方の逸士」程あつて、途中いたるところの好風景にあふごとに、むなしくはうちすぎず、あはれな作意も種々きこえた。今わかれにのぞんで、

物かいて扇ひきさくなごりかな

芭蕉は、この一句をおくつた。

八七 福井と敦賀

越前では、五十町程山へはいつて、永平寺へ参詣した。そのむかし道元禪師が、邦畿千里の地をさけて、かうした山陰に跡をのこされたには、たつといいはれがあるこのことであつた。

永平寺から福井の城下へは、わづか三里ばかりとのことに、夕飯をくつてでかけたが、黄

昏道のはかどらず、日のとつぷりとくれてから、やつとたどりついた。

福井には、等哉といふ老隠士がゐて、十年前、江戸の芭蕉庵をたつねたことがあつた。

『もはやおいほれたことぢやらう。それとも、しんだかしら？』そんなこゝをおもひながら人にとふと、

『まだ存命で、住居はそこです。』をしへた。市中からはひきこんで、あやしけな小家があり、夕顔、絲瓜がはひかゝつて、雞頭、帚木が、樞をかくしてゐるのを見て、

『さてはこの家ぢやらう。』とおもひながら、門をたゝくと、わびた女がでてきて、

『どちらの御僧でござりますか。主は、この近所の某といふへいつてをります。御用ならばおたづねなされませ。』といふ口ぶりが、まさしくかれの妻であつた。その家の風といひ、その女の様子といひ、そしてそれをとうた自分の姿といひ、芭蕉は、

『昔がたりにでもありさうな光景ぢや。』ふとそんなことがおもはれた。いはるゝまゝに、等裁の出先といふへたづねてゆくに、果然そこにあるあはせて、

『これはこれは……』このみ、快驚にたへないもののごとく、すぐさま自宅へともなつた。

かくてその家に二夜をあかし、

『明月は、敦賀の港で……』といふと、等裁も、

『では、おおくりしませう。』と、裾をかしくひつからけ、路の枝折とうかれたつた。

ゆくゆく白根が嶽はかくれて、比那嶽があらはれた。朝むつの橋をわたると、玉江の蘆は穂にでてゐた。鶯の關をすぎ、湯の尾峠をこえるに、燈が城もかくれた。山に初雁をきいて十四日の夕暮、敦賀の津に宿をもとめた。

その夜は、月がよくはれてゐた。

『明晩もかうでせう。』といふに、亭主の言葉に、

『北國のならひで、明晩の程はわかりません。』とのことであつた。

かねて芭蕉の名をきゝしつてゐた亭主は、特に酒をすゝめて優遇し、ともども氣比の明神へ案内した。祭神は仲哀天皇、社頭神さびて拜せられ、月影が松の木の間をもちて地へおちたところは、社前へ白妙の霜をしいたやうであつた。むかし遊行二世の上人は、何か大願發起のことがあり、みづから草をかり、土石をになつて、道をなほされたので、爾來參詣往來

のわづらひがなくなつた。それが例になつて、今にいたるまで、神前に眞砂をはこび、これを「遊行の持砂」といふよし、亭主の話であつた。

月きよし遊行のもてる砂の上

たのしんだ十五日は、亭主の言葉にたがはず、雨がふつた。芭蕉は、やゝ失望して、

名月や北國日和さだめなき

十六日は、さいはひ空がはれたので、ますほの貝をひろはうと、種の濱へと舟をだした。海上七里。天屋某といふが、破籠、小竹筒などをこまやかにとゝのへさせ、僕を大勢ひきつれて、案内したのであつた。舟は、追風に乗じて、時の間にふきつけた。濱には海士の小家がすこし、ほかにわびしげな法華寺があつた。その寺へはいつて、茶をのみ、酒をくむ心もち、まことに閑寂のきはみであつた。

さびしさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の聲

住僧のこひにまかせ、等裁の筆でこの日のあらしをかきつゞつて、寺にのこした。

八八 如行亭にいる

376

敦賀へは、門人路通がでむかへた。路通は、どこのものともわからず、わかぬ頃の放縦から、乞食の境界におちてゐたのを、先年行脚の途すがら、芭蕉が路のほとりに發見し、その扇にかいてしめした一首の和歌、

露さみる浮世を旅のまゝならばいづこも草の枕ならまし
といふに感心して、

おきよおきよわが友にせんねる胡蝶

の句をあたへ、門人にひろひあけたもので、爾來芭蕉に僕従し、その關係から、今度もわざわざ敦賀へでむかへたのであつた。よつて芭蕉は、等裁にわかれ、路通をひきゐて、美濃の大垣にむかつた。

途中駒にたすけられなどして、大垣へつくさ、すぐ如行の家へはいつた。先に伊勢へさつた曾良は、病氣がなほつて、この頃大垣へきあはせた。越人も馬をとばせて、名古屋からや

つてきた。木因、判口、その子此筋をはじめ、したしい人々が、日夜にとうてきて、

『お、御無事でおかへりでしたか。』

『長の御道中、いかゞと、みんなでお案じまをしてゐましたが、これはこれは……』と、たとへば蘇生した人にあふやうに、心の底から喜びいたはつた。芭蕉自身も、江戸をたつをり「もしいきてかへらば」などおもつたことを回想して、ほとんど蘇生の感があつた。

時に芭蕉の荷物のうちに、紙袋があつた。もはや不用に歸したからと、人にとらせやうとするさ、のぞみ人がおほくて、取捨にこまつたあけく、如行の門下の竹戸といふにあたへ、ために「紙袋の記」をつくつた。

古き枕、古き袋は、貴妃がかたみよりつたへて、戀といひ、哀傷とす。錦床の夜の褥には、鴛鴦をぬひものにして、二つの翼に後の世をかこつ。かれは、その膚にちかく、その句のこれらんをや、戀の一物とせん、むべなりけらし。いでやこの紙の袋は、戀にもあらず、無常にもあらず。蟹の苦屋の蚤をいとひ、驛の埴生のいぶせきをおもひて、出羽の國最上といふころにて、ある人つくりえさせたるなり。越路の浦々、山館、野亭

371

の枕の上には、二千里の外の月をやどし、蓬葎のしきねの下には、霜にさむしろのきりぎりすをきよめて、晝はたゞみて脊中におひ、三百餘里の險難をわたり、つひに頭を白くして、美濃の國大垣の府にいたる。なほも心のわびをつぎて、貧者の情をやぶることなかれと、われをしたふものにうちくれぬ。

會良も、

たゞみ目はわが手のあとぞその衾
ミ詠じて、竹戸におくつた。

如行の家には、三四日も逗留した。一日、木因亭をとうて、

かくれ家や月と菊こに田三段

の句があり、九月六日になると、伊勢の遷宮ををがまんものこ、大垣を發し、舟にのつて揖斐川をくだつた。

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

芭蕉は、この大旅行記を「奥の細道」となづけ、筆をこの一句にとどめた。

船を桑名でのりすて、いそぎ山田へきたが、九月十日の内宮遷宮式には間にあはず、たゞ外宮の式だけを拜することができた。

たふとさにみなおしあひぬ御遷宮

山田では、又玄の宅にこまつた。妻なる人は、男まさりの女で、かゆいところへ手のとどくやうに、芭蕉を待遇した。芭蕉は、おかけで旅愁をなくさめることができた。

『むかし明智日向守の妻は、夫のまづしい頃、自分の髪をきつて、酒肴の料とし、夫の朋友をもてなしたけな。今又玄の妻も、そのけなけさは、をさをさ日向守の妻にもおとらぬ。』と感じいり、

月さびよ明智の妻が話せん

一旦伊賀の上野へかへり、子供こあそんで、

雪の日は兎の皮の髭つくれ

去來のいはゆる、「しひて理會すべからず。機發に踏破してしるべ」き句があり、とどまることいくばくならずして、奈良の祭禮をみんものと、大和へむかつた。

八九 鉢たゝきをきく

伊賀から大和への山中では、

初時雨猿も小蓑をほしけなり

のちにでた「猿蓑」に冠せられた其角の序文中、

幻術の第一として、その句に魂のいらざれば、夢に夢みるににたるべし……わが翁行脚

のころ、伊賀ごえしける山中にて、猿に小蓑をきせて、俳諧の神をいれたまひければ、

たちまち斷腸のおもひをさげびけん、あだにおそるべき幻術なり。

とみえるくらの、數ある芭蕉の吟中、はなはだ重要なる一句があつた。

奈良では、

初雪やいつ 大佛の柱たて

奈良の大佛は、すぐる永祿の年に、松永久秀の兵火にかゝつて燒失したきり、百二三十年後のこの際までも、雨さらしになつてゐたのであつた。

それより上洛、京と江州大津、堅田、膳所各地との間を漂泊する程に、元祿二年のとしものこりすくなになつた十二月二十四日、鉢叩をきかんものと、洛西嵯峨野に去來の落柿舎をさうた。鉢叩といふのは、二三人づつうちつれた空也僧が、瓢箪をたゝき、鉦うちならし、空也上人作の歌をうたひながら、寒の中と春秋の彼岸とに、都のそと七個所の三昧をめぐり無縁の手向をするのであつた。

しかるに、その夜は、風のはけしい上に、雨さへそほふつて、頓に鉢叩がこなかつた。篤實な去來は、

『翁にも、さぞおまちかねのことぢやらう。』と察して、

籌こせまねてもみせん鉢たゝき

さ吟じ、灰吹の竹をうちならしてみた。その聲は、われながら妙にきこえた。灰吹をかりたのも、火宅をでよとの心であつたが、あはれな節々は、まことの鉢叩ににるべくもなかつた。

が、鉢叩はこなかつた。鉢叩については、越人は、

月雪に鉢たゞき名は甚之丞

と興じた。去冬其角が上洛して、

ことごとく寝覺はやらじ鉢叩

といつたのは、そのあはれさ、一人できくにたへなかつたのであつた。それらの句どもをおもふにつけても、

『はやくおきかせまをしたい。』

『はやくきゝたい。』とおもふのであつたが、鉢叩は、容易にこないで、ふきしきる風、そほふる雨の中に、いたづらに夜がふけていつた。

『明晩のこゝにして、今晚はもうおやすみなさいませんか。』去來がいつても、

『いや、きゝもらしても残念ぢや。このまゝ夜をあかしても……』と、芭蕉は、きはめて熱心であつた。

熱心のかひがあつて、もはや曉ちかい頃、横雲の影から、からびた聲してやつてきた。

『なるほど、おいほれて足のよわいものは、友におくれて、一人になるのぢやらう。』といひ

ながら、

長嘯の塚もめぐるか鉢たゞき

長嘯子は、木下肥後守家定の子で、少將若狭守勝俊といひ、豊臣太閤の夫人淺野氏の甥にあたる人。豊臣氏の滅亡におよび、洛東靈山にかくれ、邸内に舉白堂をはじめ、半日亭、獨笑亭、待必樓、松洞臺、鳥羽觀などをつくり、歌仙堂をまうけて、三十六歌仙の像をかゝけるなど、風流のかぎりをつくす程に、財もやうやくまほしくなると、

いける日のやどの烟ぞまづたゆるつひの薪の身はのこれども

と詠じて、西山の小鹽にうつりすんだ。をよりは慶長二年の冬で、辭世の詞があつた。

王公といへども、あさましき人間のわづらひをばまぬがれず。すべて身のうまれいでざらんにはしかじ。ましていやしくまづしからんは、いふにもたらず。されば死は、めでたきものなり。ふたゞびかの古里にたちかへりて、始もなく終もなきたのしみをうる。このたのしみをふかくさとらざるともがら、かへりていたみなけく。おろかならずや。

露の身のきえてもきえぬ置所草葉のほかにまたもありけり

あと枕もしらやみふせりて、口にいづるをふとかきつくる。人わらふべきことなりかな。

また希代の大隠士で、芭蕉も平生その爲人を追慕してゐたのであつた。

九〇 石山の幻住庵

元祿三年、四十七歳の正月は、江州の膳所でむかへた。

たれ人か菰きています花の春

西行法師には、おほく乞食を詠じた歌があつた。芭蕉従來の句に、それのないこゝまをかへりみて、かくはよんだのであつた。

數々の門人中、芭蕉のもつとも同情して、寤寐にもわすれえなかつたのは、伊良古崎の配所にかくれて、わびしい月日をおくつてゐる杜國のことであつた。正月早々、一旦故郷の伊賀へかへると、

いかにしてか便もござなく、もしは渡海の船やうちわれけん、病魔やふりわきけんなど

方寸をくだくのみに候。されども名古屋の文に、御無事の旨推量にみえまをし候。拙者も霜月末、南都祭禮見物して、膳所へいで越年、歳旦京ちかき心。

こいつて、右の乞食の句をはじめ、近詠數句をしめし、

急便早々に候。正二月の間伊賀へおこし、まち存じ候。宗七もお噂をすばかりに候。

正月十七日

はせを

萬菊丸様

この消息をおくつて、待望の意をいたした。

故郷にとどまること一ヶ月、ふたたび江州へでやうこして、途中伊勢松坂に園女をとひ、

暖簾の奥ものゆかし 北の梅

といふ句があつた。園女は、このまき門下にはいつた。

江州では、例によつて、大津、膳所のあたりをあちこちして、目をおくつた。大津では、珍碩の洒落堂にあそんで、その記があつた。

山はしづかにして、性をやしなひ、水はうごいて、情をなぐさむ。動靜二つの間にして